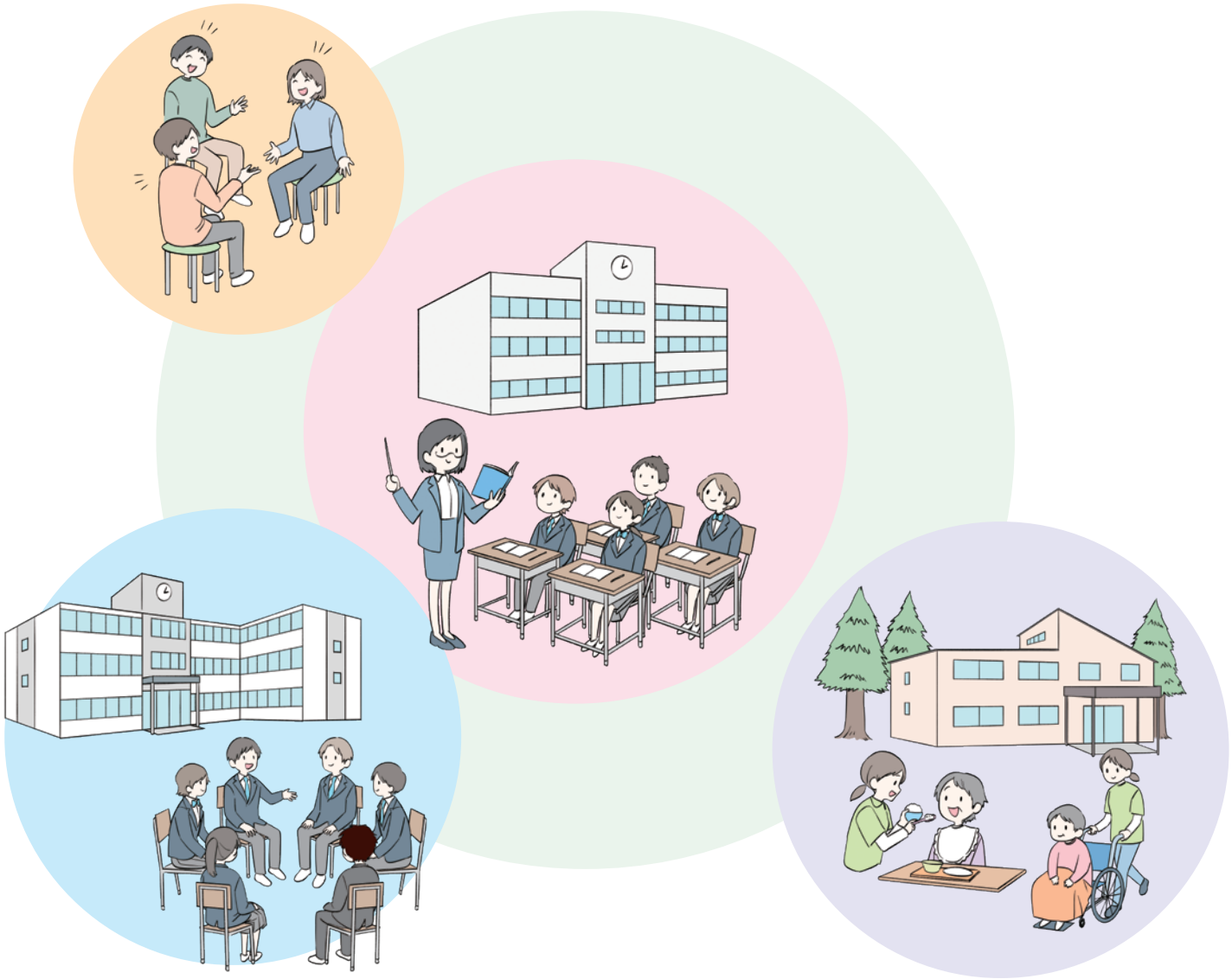
令和6年度　老人保健事業推進費等補助金　老人保健健康増進等事業
介護福祉士養成施設における国家試験合格に向けた取組に関する調査研究事業

介護福祉士養成のための6つの視点に関する取組事例集

～地域の福祉を支える介護福祉士を養成するために～



MUFG
三菱UFJリサーチ&コンサルティング

はじめに

介護福祉士養成施設（以下、「養成施設」という。）は、介護福祉士の養成という重要な使命に基づき、日々教育の質の向上に努め、多くの介護福祉士を輩出してきました。

今後さらなる要介護者等の急速な増加が見込まれる中、複雑化・多様化する介護ニーズに対応できる高い専門性を有する介護人材の確保は大きな課題であり、養成施設が担う役割は今後も非常に重要です。

近年では養成施設数、入学定員数、入学者数はいずれも減少傾向にありますが、その中でも多くの養成施設は多様な学生を受入れており、質の高い介護福祉士を地域社会に送り出すという大きな社会的役割を担っています。多くの学生から選ばれるよう、養成施設自身がカリキュラムの充実、実習の充実等を図りつつ、自施設の強みを生かした、特色ある教育を引き続き行うことが求められています。

そこで本事業では、養成施設の運営や教育方法の工夫等の実態を把握することを目的に、文献による情報収集やヒアリング調査を行うことにより、それら多様な取組を紹介し、各養成施設の教育活動の参考にしていただくための事例集を作成しました。

今後の養成施設の取組のご参考になれば幸いです。

目 次

はじめに 1
目 次 2
介護福祉士養成のための6つの視点 3
事例の選び方 5
事例一覧 5
6つの視点に関する介護福祉士養成施設の多様な取組 8
1. 介護福祉士養成課程への入学者数を増やす 8
（1）日本人学生の確保 8
（2）外国人留学生の確保 16
（3）自治体との連携 18
2. 介護福祉士国家試験へ導くと共に、介護福祉士としての倫理を涵養する 19
（1）カリキュラムや実習の充実 19
（2）介護福祉士国家試験対策 38
（3）教員の資質向上 41
3. 中途退学を防ぐ 42
4. 就職までの支援、就職後の定着支援をする 44
（1）就職までの支援 44
（2）就職後の定着支援 47
5. 国家試験不合格者等を卒業後もフォロー・支援する 48
6. 地域と連携し、介護福祉士を育てる 49
本事例集の作成にご協力いただいた介護福祉士養成施設 55

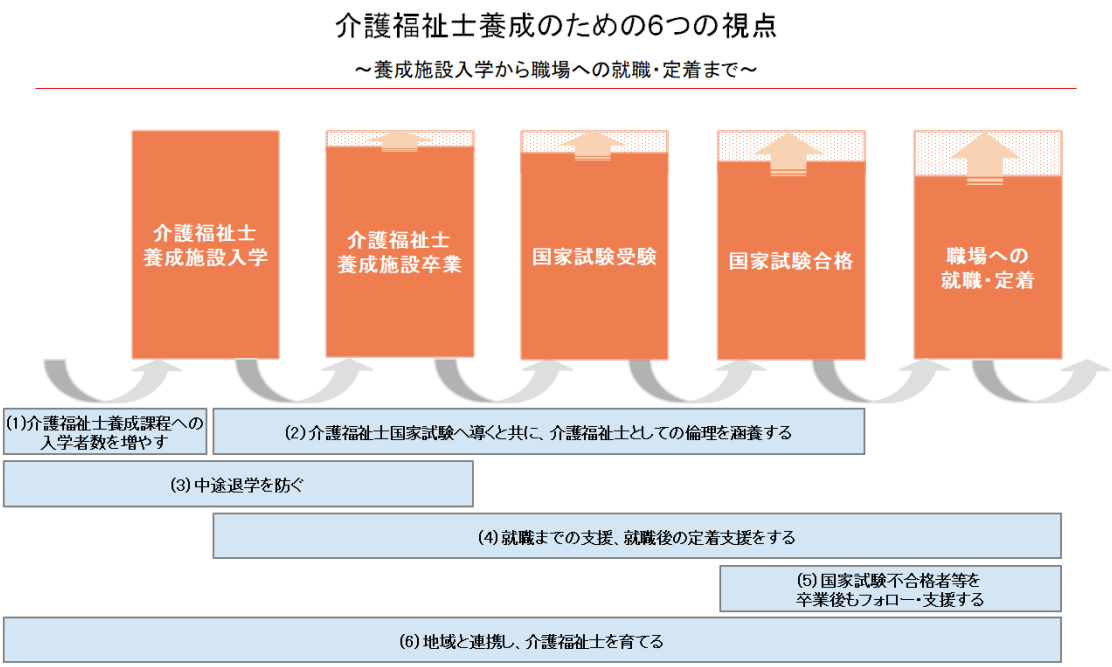
介護福祉士養成のための６つの視点

養成施設がより多くの質の高い介護福祉士を養成するための視点を ６ つに整理しました。

介護福祉士養成課程への入学者を増やす、途中で離脱することなく、日々の教育を通して介護福祉士国家試験合格と卒業まで導く、就職までの支援及び就職後の定着支援により、卒業生の介護福祉士としての活躍を見守るという流れに沿った取組が求められています。国家試験不合格等の卒業後のフォロー・支援も必要です。

また、いずれの局面においても、養成施設と地域が連携することが求められています。小・中・高校生への介護の魅力の発信、充実したカリキュラムや実習の提供、学生の就職先との連携・情報交換等、日々の養成施設の活動は内部にとどまっているだけでは効果を生むことができず、教員が学生と一緒になって、積極的に地域に出ていく必要があります。

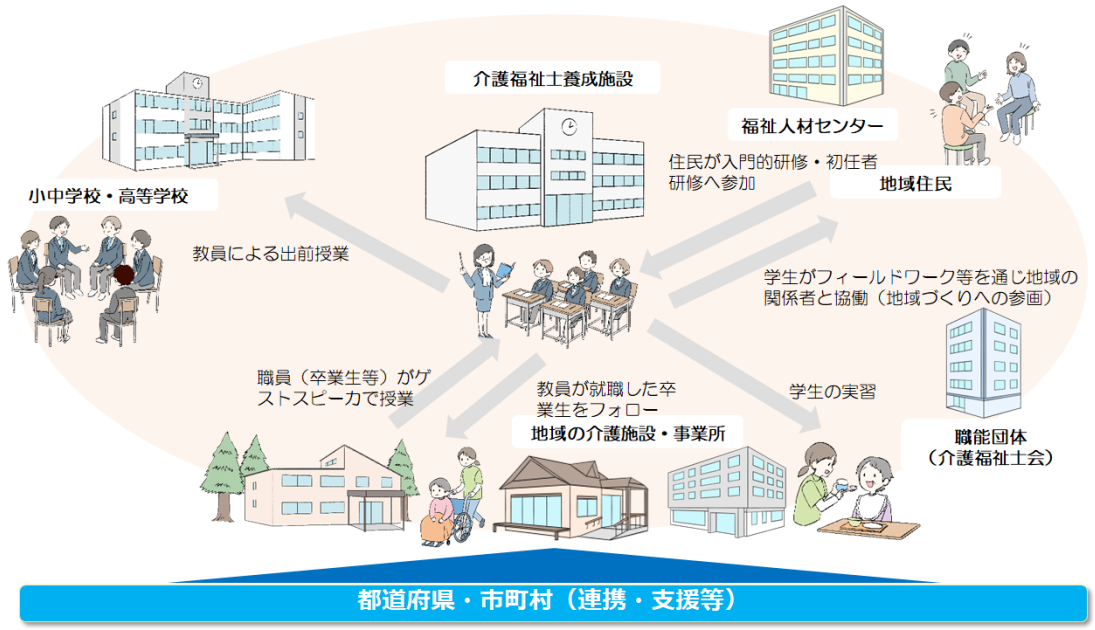
－介護福祉士養成課程への入学者数を増やす
－介護福祉士国家試験に導くと共に、介護福祉士としての倫理を涵養する
－中途退学を防ぐ
－就職までの支援、就職後の定着支援をする
－国家試験不合格者等を卒業後もフォロー・支援する
－地域と連携し、介護福祉士を育てる



これらの取組を通じて、養成施設の学生や教員が地域とかかわり、自治体とも連携することによって、「養成校を地域で支えていく」、「養成校が地域の介護の関心を高めていく」といった好循環が生まれてくると思われます。

地域と連携し、介護福祉士を育てる介護福祉士養成施設

○　介護福祉士養成施設は、地域の介護事業者や地域住民等と連携・協働して、所属する学生を介護福祉士として育てる。
○　さらに、養成施設の機能を最大限活用して、小・中・高の生徒に出前授業を通じて、介護の魅力を発信したり、地域住民に研修を実施して、介護助手として介護現場に関わることにつなげるなど、地域の介護人材育成の拠点として活動することが期待される。



事例の選び方

ここでいう「事例」とは、本事業で検討した 「介護福祉士養成のための6つの視点」（p.3 参照）に関する各養成施設の多様な「取組」のことを指しています。

各視点に関する取組を行う養成施設の中から、養成施設の種別（専門学校、短期大学、4年制大学）や地域性を踏まえて候補を選定し、協力を得られた養成施設の事例（取組）を掲載しています。

事例一覧

6つの視点に関する介護福祉士養成施設の多様な取組 8
1.　介護福祉士養成課程への入学者数を増やす 8
（1）日本人学生の確保 8
＜小学校・中学校・高等学校との連携＞ 8
小・中・高等学校での福祉教育の推進 8
イベントや出前講座の開催による高校生への直接的アプローチ 9
「駅なかオープンキャンパス」による情報発信 9
中高学生が参加できる介護・福祉の体験教室、ボランティア企画の実施 10
「病院で働く介護福祉士の養成」を学校の特徴として PR 11
＜入学後の学生への働きかけ＞ 12
入学前・入学直後の魅力発信による介護福祉コース選択者の確保 12
1年次春学期の「介護の基本」の授業による学生の確保 13
課程選択の猶予期間を通じた学生の確保 13
＜若い世代や社会人への働きかけ＞ 14
生涯教育講座の開催による高校生への間接的アプローチ 14
働きながら学び、介護福祉士を目指す長期履修制度の導入 15
（2）外国人留学生の確保 16
国内日本語学校との連携による県内各地域への人材輩出 16
卒業生を「留学生アドバイザー」として活用 16
海外での学生募集から養成施設卒業までの一貫した教育 17
（3）自治体との連携 18
介護人材確保に関する自治体包括連携協定の取組 18
2.　介護福祉士国家試験へ導くと共に、介護福祉士としての倫理を涵養する 19
（1）カリキュラムや実習の充実 19
＜医療法人等と連携した医療的ケアの実習＞ 19

実地研修の実施による学生の自信創出 19
病院実習・医療的ケア実地研修の実施 20
＜医療と福祉の連携＞ 21
看護学生と共に学ぶことによる他職種への理解促進 21
＜ICT など最新機器についての学びの提供＞ 22
授業における ICT や AI の積極的な活用 22
＜地域づくりへの積極的な関与＞ 23
地域をフィールドとして少人数で学ぶ「地域活動研究」を実施 23
地域でのフィールドワーク等を通じた学生の満足度向上 24
＜外国人留学生へのきめ細やかな支援＞ 25
留学生の日本語学習支援・日本人学生とのサポート関係構築 25
各段階における日本語レベルの目標設定と独自教材の開発 26
養成施設における日本語教師の採用 26
＜福祉経営の学びを通したリーダー人材の育成＞ 27
独自科目の展開「福祉経営とリーダーシップ」 27
＜研究の基礎、「書く力」や「根拠を説明できる力」の育成＞ 28
介護福祉に必要な研究的視点を養うための独自科目「研究」 28
卒業後を見据えた「書く力」「根拠を説明できる力」の育成 29
＜災害介護に関する授業の導入＞ 30
防災に関する科目の導入 30
授業内での「避難所運営ゲーム」の実施 31
＜家族全体をみる視点の養成＞ 32
家族や世代のつながりに関する学びの機会の提供 32
＜実習の充実＞ 33
基礎実習に「シャドーイング」を導入したことで、介護福祉士取得希望者が増加 33
＜学習環境の整備＞ 34
実習先の介護現場に近い学習環境の整備 34
＜教員や先輩との密な関係づくり＞ 35
教員によるチューター制度を通じた手厚いサポート 35
教員の丁寧な指導やポロシャツの支給等による一体感の醸成 35
TA などの先輩と触れ合う機会の提供 36
社会で活躍する介護福祉関係者による授業内講演 37
（2）介護福祉士国家試験対策 38
＜学びの確認・定着が導く国家試験合格への道のり＞ 38
学びの習熟度・定着度を確認するための介護福祉士国家試験対策 38
アウトプットによる学習成果の定着 38
＜外国人留学生のサポート＞ 39

「留学生アドバイザー」が外国人留学生をサポート……39
外国人留学生向けが頑張るきっかけづくり……40
＜外部講師の導入＞……40
国家試験対策講座への外部講師の導入……40
（3）教員の資質向上……41
教員同士のピアレビューによる教育の質向上……41
3.　中途退学を防ぐ……42
教職員、家庭、出身高校等の連携による学生支援……42
多様な選択肢・相談先の提供……43
4.　就職までの支援、就職後の定着支援をする……44
（1）就職までの支援……44
キャリア形成支援講座により、将来のビジョンを考える機会を提供……44
ホームカミングデーの開催を通じた卒業生との交流……45
自らの適性を見きわめ、キャリアモデルに出会う介護実習……45
多様な実習先の提供による進路の選択肢の拡大……46
（2）就職後の定着支援……47
留学生の就職先施設への訪問による継続的な見守り……47
就職先へのフォローアップ訪問・オンライン同窓会……47
5.　国家試験不合格者等を卒業後もフォロー・支援する……48
国家試験不合格者への継続的な情報共有や支援……48
6.　地域と連携し、介護福祉士を育てる……49
介護助手の育成等による地域貢献……49
教育課程に地域でのフィールドワークを取り入れ、生きた学びの機会を提供……50
「世代間交流」を意図した科目を通じた高齢者や子どもとの交流……51
地域と連携した防災イベントの開催……52
社会福祉協議会を通じた介護現場からの講師受入れ……53
地域住民向けの授業等における学生の活躍……54

６つの視点に関する介護福祉士養成施設の多様な取組

1.　介護福祉士養成課程への入学者数を増やす

養成施設にとって、入学者の確保は喫緊の課題となっています。

小学校・中学校・高等学校との連携は、介護の魅力発信や中途退学防止（ミスマッチ予防）の観点から重要な意味があります。4年制大学や短期大学では、学部や学科単位で学生を受け入れる形が多いため、入学後のイベントや、教員が介護の魅力を伝えることによって、介護に関心を持ち、介護福祉士を目指す学生もみられます。

また、近年、外国人留学生が増加しており、今後も同様の傾向が続くものと考えられます。そのような中、国内の日本語学校と連携したり、外国人留学生の確保に向けて、積極的に海外現地への働きかけを進める養成施設も出てきています。

(1) 日本人学生の確保

＜小学校・中学校・高等学校との連携＞

小・中・高等学校での福祉教育の推進

（北海道介護福祉学校：北海道夕張郡栗山町）

介護に関心を持つ人の裾野を広げるためには、より早い時期から体験を通じて介護の仕事を知る機会を提供することが必要との考えのもと、北海道介護福祉学校が中心となって、栗山町の小・中・高等学校での一貫的な福祉教育を推進している。

小学校から高校までの 12 年間を一つの継続した学びとして捉え、小学校では遊びから福祉を学び、中学校では仕事としての福祉を学ぶなど、各教育段階に応じたプログラムを作成している。また、高専一貫教育プログラム開発・実証事業にて、北海道栗山高等学校との協働体制を構築し、高校の学校設定科目「栗山と福祉」において、北海道介護福祉学校の教員や学生が授業への協力を行っている。

高校などでの出前授業への協力は、北海道介護福祉学校の学生にとっては、これまでに学んできた内容を人に伝えることを体験する機会になる。また、高校生にとっては、年代の近い学生から学ぶことで、ロールモデルとして認識しやすく、関心を持つ人の裾野を広げる活動につながると考えられる。

栗山町で実施している福祉教育のプログラムについて、連携先の自治体にも情報提供を行い、北海道内で取組を広げている。

＜一貫した福祉教育の体系＞

（北海道介護福祉学校資料）

イベントや出前講座の開催による高校生への直接的アプローチ

（いばらき中央福祉専門学校：茨城県水戸市）

地域の高校生の介護・福祉への理解度を高めるため、高校生を対象とした様々なイベントを開催している。

2023 年には「暮らし、地域とつながることで景色が違ってみえてくる。地域の魅力に”気づく”フィールドワーク！」として、地元（大洗・髭釜商店街）の歴史に詳しい高齢者や地元の住民に話を聞き、参加者一人ひとりが思う地域や商店街の魅力を冊子にまとめた。本校の学生・卒業生や地域で働く介護福祉士等、様々な年代、職種の方に参加してもらうことで、高校生が「かっこいいお兄さん・お姉さん」に出会う機会を設けた。

また、水戸市内の障害者施設等の協力を得て、高校生が体験取材を行い、地域の魅力に関するキャッチコピーを作成するイベントを開催したこともある。当日は 246 名もの参加者が集まった。

さらに、高校の家庭科に福祉の授業が入ったことをきっかけに高校教員との接点ができ、2024 年度から高等学校での出前講座を開始した。本校が高校の授業に参加することで、高校生本人だけでなく、高等学校の先生にも介護の仕事への理解が深まるよう、働きかけをしている。先生に味方になってもらうことで、高校生の介護の仕事に対する印象を高めている。

「駅なかオープンキャンパス」による情報発信

（富山短期大学：富山県富山市）

小中高校生や社会人等へ情報発信や体験の場を提供することで、健康や福祉への関心を高めてもらい、理解を促進することを目的として、「駅なかオープンキャンパス」を実施している。大学が郊外にあることから、多くの人が往来する富山駅での情報発信を企画した。

特別養護老人ホームや就労支援事業所、連携している事業者の協力のもと、介護ロボットや ICT ツール等の体験をしてもらい、介護のイメージアップを図っている。その他に、教養演習のフィールドワークで学生が調査した結果の発表や、親子で楽しめる e スポーツ体験などを用意している。

取組の結果、すぐに入学につながっているわけではないが、多くの人に学校を知ってもらう機会になっている。立ち寄った一般の方から、「パンフレットを孫に渡してみる」と言ってもらったこともある。

＜令和6年度チラシ＞

（富山短期大学資料）

中高学生が参加できる介護・福祉の体験教室、ボランティア企画の実施

（聖隷クリストファー大学介護福祉専門学校：静岡県浜松市）

自ら介護を志す人は、中学、高校までに意思を固めていることが分かってきたため、中学生・高校生が参加できる介護・福祉の体験教室や、介護・福祉の体験ボランティア企画を実施している。

年間で３回（毎年７月、10月、12月頃）開催。車いすでキャンパス内をめぐってみる体験や、ベッド上での介護体験、ミニ講義などを実施している。在校生とともに介護施設に訪問し、入所者と交流する体験や、介護施設でのクリスマスの讃美歌合唱やクリスマスオーナメント作りなどのボランティア体験も実施している。

＜中高生向けミニ講義における資料＞
（聖隷クリストファー大学介護福祉専門学校資料）

＜学校 HP 掲載の広報資料＞
（聖隷クリストファー大学介護福祉専門学校資料）

参加者募集は、学校 HP 上での告知に加えて、本学に進学する生徒が多い高校には、実施予定が近づいてきた段階で個別に声がけしている。また、浜松市教育委員会を通じて、市内の中学校には、年間の予定を幅広く周知している。
高校3年生でこれらの取組に参加する生徒は、ほぼ全員本学を受験している。中学生の参加者はまだ少ないが、参加した後、本学受験につながった例も出始めている。

「病院で働く介護福祉士の養成」を学校の特徴として PR

（川崎医療短期大学：岡山県岡山市）

医療介護福祉学科では、医療に強い介護福祉士の養成を目指しており、回復期リハビリテーション病棟や地域包括ケア病棟などで活躍する卒業生も多い。病院で勤務し、患者が回復していく過程を支える介護もあると知って、介護福祉士に関心を持つ高校生もいるため、本学では、病院で働く介護福祉士を養成する教育を行っている点を強調して、学校の PR を行っている。

オープンキャンパスでは、病院見学をして実際に働く介護福祉士に接するプログラムや、卒業生がユニフォーム姿で講話をするプログラムを設けている。また、小・中・高校生向けの「チャレンジセミナー」でも、病院で働く介護福祉士の存在をアピールしたり、中学校の職場体験で、病院で勤務している介護福祉士から話を聞く機会を設けるなど、小中学生・高校生や教員、保護者に医療現場で活躍している介護福祉士を知ってもらう機会を確保している。

その結果、医療に強い介護福祉士を目指す学生の入学希望につながり、学科の卒業生のうち、約半数が病院に就職している。

＜入学後の学生への働きかけ＞

入学前・入学直後の魅力発信による介護福祉コース選択者の確保

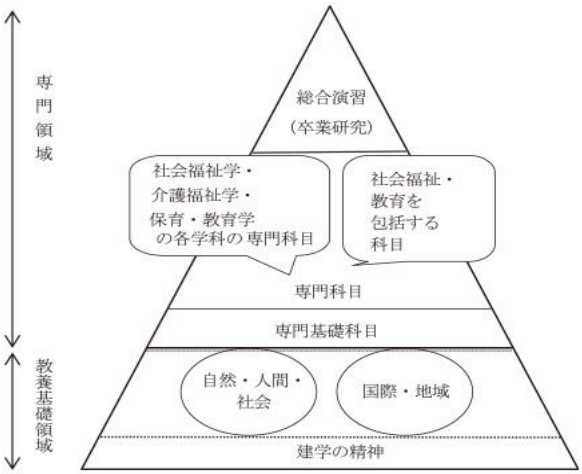
（聖隷クリストファー大学：静岡県浜松市）

社会福祉学科内には、介護福祉コースのほかに、ソーシャルワークコース、福祉心理コースがあり、コース選択は、入学後に行う仕組みになっている。入学時点で介護福祉コースを志望している学生は必ずしも多くないため、一人でも多くの学生に介護福祉コースを選択してもらうことを目的として、入学前・入学直後に取組を行っている。

入学前の段階では、社会福祉学科が入学予定者に対して課す「入学前課題」の中に、特定のキーワードに関連する新聞記事を探し、レポートを作成するというものがあるため、「介護」や「高齢者」といったキーワードを必須として、学科の入学者全員に、介護に関心を持つきっかけを作っている。レポートが提出された後は、丁寧にコメントを付けて、「介護分野で活躍したい」という気持ちを引き出す工夫をしている。

次に、入学直後に実施されるオリエンテーションやコース選択ガイダンスで、介護福祉コースの４年生や卒業生に登壇してもらい、体験談を交えて、介護や介護福祉コースの魅力を話してもらっている。介護福祉コースに進学した場合、介護以外にも医療、障害、子どもの分野など多様なキャリアを目指せるといった、コース進学後の選択肢の広さも説明して、将来のキャリアに迷っている学生も取り込む工夫をしている。

＜介護福祉コースの在校生たち＞
（聖隷クリストファー大学資料）



＜カリキュラムの基本構造＞
（聖隷クリストファー大学資料）

さらに、２年次への進級時にも、他コースからの転向者を積極的に迎え入れている。

これらの取組により、入学当初に介護福祉コースを志望している学生が他のコースに移ってしまうことを防止しながら、新たな志望者を獲得して、目標とする定員に近い学生を確保することができている。

1年次春学期の「介護の基本」の授業による学生の確保

（桃山学院大学：大阪府和泉市）

桃山学院大学社会福祉学部ソーシャルデザイン学科には、介護福祉士国家資格取得を目指す学生もいれば、福祉全般に関心を持ち、福祉の視点を活かして一般企業に就職することを希望する学生もみられる。

介護福祉士養成課程の選択は1年次の秋学期が始まるまでに行うことになっているので、入学後半年間に何度か説明会を開催している。

また、1年生春学期に、「介護の基本」の 180 時間（6 コマ）のうち、30 時間（1 コマ）について、「生活支援論」の科目名で、学科全体の学生に向けた授業を開講している。授業の前半では生活上の困難や課題を抱える人々（高齢者、障害者、低所得者、子ども、家庭等）を支援対象とした地域コミュニティの形成と行政機関との連携等について紹介している。後半では徐々に「介護の魅力」を伝えられるような工夫をしながら、先進的な高齢者施設での実践例の紹介等を行うことで、学生の介護への関心を高めている。

授業を通して、介護の魅力を感じ、高齢者施設の職員等に現場の話を聞くことで介護に対するイメージが変わり、入学当初は社会福祉士だけを考えていた学生の中には、介護福祉コースを選択し本格的に学び始める学生もいる。

課程選択の猶予期間を通じた学生の確保

（東洋大学：東京都北区）

介護福祉士養成課程の登録・開始時期を 1 年生の春学期から秋学期に移し、学生に対して説明する期間、および学生に課程選択の猶予期間を与えることで、より多くの学生の確保を目指している。

学生には、教員が介護福祉士養成課程について説明することに加えて、先輩学生が学科の魅力を PR したり、参加学生とともに話したりする時間も設けている。先輩学生から実体験にもとづいた話を聞くことができるため、後輩学生たちもより具体的なイメージをもって考えることができる。

また、先輩学生自ら、PR 動画を編集したり、パンフレットを作成したりもしており、後輩たちに介護福祉士養成課程の魅力を伝えることにつながっている。

入学前に課程選択の希望を取り春学期から課程を開始していた頃は、入学後の課程変更の申し出により定員が充足しないことがあったが、秋学期からの課程選択を開始して以降、希望者が定員を超えて選抜を行う年もある。

学科の母数が増加したことも学生の確保を促した一つの要因と考えられるものの、希望者の中には、入学時点では考えていなかったものの、授業やガイダンスの中で介護福祉士養成課程に興味をもったという学生も見られる。

＜若い世代や社会人への働きかけ＞

生涯教育講座の開催による高校生への間接的アプローチ

（いばらき中央福祉専門学校：茨城県水戸市）

高校生の進路選択に影響を与える身近な介護・福祉従事者が、いきいきと地域で活躍できるよう、地域の介護・福祉従事者の仕事へのやりかい・満足度向上につながる「生涯教育講座」を開催している。

本校のプロジェクト（茨城から福祉で世界を元気にするプロジェクト、通称「いばふく」）を通じて、2016 年から 2024 年の間に 130 回の研修を実施し、120 名以上の講師を招いた。参加者数は延べ 12,343 名である。例えば、2024 年 10 月 26 日（土）には、西村宏堂氏（僧侶、メイクアップアーティスト、LGBTQ 活動家）を招き「自分らしく」をテーマに講演を実施した。

福祉業界に限らず、普段はなかなか会えないような人を招き、各分野の専門家が「働いている介護職向け」に話をすることで、地域の介護・福祉従事者の視野の拡大に貢献している。

また、本校の卒業生が運営ボランティアの主力となっており、若手の介護・福祉従事者の活躍の場づくりにもつながっている。加えて、このことをきっかけに、講師経験者がインフルエンサーとなり、「介護」について語ってくれるという副次的効果も生んでおり、「介護の魅力」発信につながっている。

＜生涯教育講座の例＞

（いばらき中央福祉専門学校資料）

働きながら学び、介護福祉士を目指す長期履修制度の導入

（日本赤十字秋田短期大学・介護福祉学科：秋田県秋田市）

より多くの介護職員に、養成校で学び、国家試験を受けて介護福祉士になってほしいという思いから、社会福祉法人等にニーズ調査を行ったところ、初任者研修を修了してすぐに社会福祉法人等に就職する方が一定数いること、経済的な理由等で短大に進学するのは難しい方もいることを把握した。そのような方々にも学ぶ機会を提供するため、働きながら学ぶための長期履修制度を創設し、令和 7 年度から運用を始める。

長期履修制度では、現在就業している社会福祉法人等で働きながら、通常は 2 年間であるカリキュラムを3年かけて学び、在学中に介護福祉士国家試験を受験、卒業後も現職場で継続して就業することができる。学費も 2 年分を 3 年に分けて納入できる。

働きながら養成校で勉強をする上では、就業先の理解・協力を得る必要があるなどの課題もあるが、介護職員が養成校でしっかりと教育を受けることで、就業先の介護の質の向上にも貢献できることをアピールしながら、一人でも多くの学生を迎えていくこととしている。

(2) 外国人留学生の確保

国内日本語学校との連携による県内各地域への人材輩出

（いばらき中央福祉専門学校：茨城県水戸市）

外国人留学生を確保・育成し、本校が拠点となって県内各地に介護人材を輩出するため、県内2校の日本語学校と連携している。

A 日本語学校（茨城県日立市）とは、県の業界団体が開催する海外視察研修で知り合い、2020 年から連携を開始した。A 日本語学校は専門学校や大学への進学実績のある進学校であるが、当時、進学先が決まらない私費留学生の進路開拓を課題としていた。現在では本校への進学を選択肢のひとつとし、卒業生が継続的に本校に入学している。また、A 日本語学校の海外現地（ネパール）とのネットワークを活用し、一緒に現地に赴いて外国人留学生を獲得するルートを構築した。その他、本校の日本語教師が A 日本語学校の研修に参加する、介護現場で働く技能実習生・特定技能外国人の学習支援（県委託事業、約 10 施設）や日本人職員向けの研修に一緒に取り組むなど、密な関係を構築している。

B 日本語学校（茨城県鉾田市）とは、県の業界団体を通じて面識のあった介護施設からの紹介で知り合った。それまで主に技能実習生や特定技能外国人の日本語教育を行っていたが、進学希望者が増えてきたことから進学先を探しているところだった。B 日本語学校がもつネットワークを通じて海外現地（インド）とのつながりをつくり、共に人材確保の活動を行っている。2025 年度から約 10 人の学生が入学予定である。

本校が採用に関わった学生が、県内各地域の介護施設でアルバイトをしながら日本語学校に通った経験があれば、本校卒業後、その地域に就職する可能性が出てくる。本校が地域の介護人材育成・供給の拠点になることを目指し、養成施設と日本語学校双方の強みを活かして地域を支えている。

卒業生を「留学生アドバイザー」として活用

（いばらき中央福祉専門学校：茨城県水戸市）

海外現地の学生に、日本で活躍する外国人介護福祉士のモデルを示すため、本校と同じ法人が運営する施設に就職した卒業生が、留学支援アドバイザー（ベトナム出身 1 名、ネパール出身 1 名）として活躍している。

留学生アドバイザーは、留学生募集の際は法人の担当職員とともに現地に赴き、介護の仕事や地域（茨城県）の魅力を伝えている。また、介護福祉士国家試験に合格し、在留資格「介護」を取得できた時の喜びやメリットの大きさについて、経験を交えながら現地の言葉で説明している。

実際に日本で活躍している先輩から直接話を聞くことで、海外現地の学生は将来の目標を具体的にイメージすることができるとともに、日本や介護の仕事に対する誤解を防ぐこともできている。また、仕事と勉強の両立の難しさや国家試験合格のための努力など、厳しい話もすることで、それでもなお日本に行きたいと思う、意欲の高い学生を確保することができている。

海外での学生募集から養成施設卒業までの一貫した教育

（若狭医療福祉専門学校：福井県三方郡美浜町）

留学生の受入れについて、以前は海外の送出機関の紹介により、本校（若狭医療福祉専門学校）と同じグループ内、あるいは別の日本語学校を経て、本校に入学していたが、留学生と直接意思疎通を取ることが難しく、ミスマッチが生じることがあった。

そこで、2019 年に、フィリピンに日本語学校を開校し、現地での学生募集から本校卒業まで、グループ内で一貫して教育をするスキームを導入した。来日後に通う日本語学校および本校の学費は、介護事業者が奨学金を貸与し、卒業後、その法人で働きながら返済することになっている。なお、日本語学校をフィリピンに開校したのは、フィリピン人が持つホスピタリティーが介護にマッチしていること、フィリピン人の多くが英語で会話できることなどの理由による。

留学生には、日本で長く働くためには介護福祉士国家試験に合格する必要があること、本校では国家試験合格に向けた学習プログラムが準備されていること、奨学金は就職後に返済することなどについて、来日前から丁寧に説明して安心感を高めるとともに、来日前後でミスマッチが生じづらい状況を作っている。

新型コロナウイルス感染症による入国制限措置の緩和後、この受入れスキームにより 200 名を超える留学生を受け入れており、現状の定着率は 99%を超えている。

＜フィリピンの日本語学校（上）、若狭医療福祉専門学校（下）＞

（若狭医療福祉専門学校資料）

(3) 自治体との連携

介護人材確保に関する自治体包括連携協定の取組

（北海道介護福祉学校：北海道夕張郡栗山町）

栗山町及び北海道介護福祉学校は、「介護人材確保のための自治体包括連携協定」を道内の市町村と締結し、双方の課題である学生確保と介護人材確保に取り組んでいる。通学可能な範囲に養成校がない自治体と包括連携協定を締結することで、その地域での学生募集につなげることを目指している。

協定を締結した連携自治体は学生募集に協力し、栗山町は連携自治体から推薦を受けて入学する学生に対し、入学金・授業料をそれぞれ 10 万円ずつ減免する。現在（2024 年 12 月時点）までに、道内 16 市町村と協定を締結した。2023 年に1名、2024 年に1名が自治体推薦を受けて入学し、2025 年度には3名の入学が見込まれている。

学生募集においては、連携自治体の高校の教職員から自治体推薦の仕組みについて説明したり、北海道介護福祉学校の職員が各自治体の高校に出向いて、説明や個別相談をしたりしている。

包括連携協定の枠組みの中で、各自治体での小・中・高等学校での福祉教育への協力も行っており、地域で将来の介護人材を発掘し、学校での2年間の専門教育を経て、地元に戻って活躍するというサイクルの確立を目指している。

＜介護人材確保に関する自治体包括連携協定＞

（北海道介護福祉学校資料）

2. 介護福祉士国家試験へ導くと共に、介護福祉士としての倫理を涵養する

多くの養成施設では、カリキュラムや実習の充実等を図り、自施設の強みを生かした、特色ある教育を行っています。

特色ある教育として、例えば、

－介護福祉士と社会福祉士、介護福祉士と保育士などダブルライセンスを取得しやすい養成施設

－医療法人と連携した医療的ケアの実習までを経験することができる養成施設

－ICT、介護ロボットなど最新機器について学べ、経験することができる養成施設

－地域づくりに積極的に関与する養成施設

－日本語学校と連携して外国人留学生へのきめ細かな支援を行う養成施設

などさまざまな類型が考えられます。ここでは、このような多様で特色ある教育の事例を掲載しています。

(1) カリキュラムや実習の充実

＜医療法人等と連携した医療的ケアの実習＞

実地研修の実施による学生の自信創出

（北海道医療大学：北海道石狩郡当別町）

本学では、医療的ケアの基本研修と演習を 3 年次に通年で行っている。実地研修は 4 年次に実施しており、ほとんどの学生が参加する。教員のネットワークを活かし、2 つの病院に協力を依頼している。

基本研修は講義形式で、なぜそのケア（気管切開、喀痰吸引等）が必要になったのか、利用者がどのような経過をたどり現在の状態に至っているのかを理解できることに重点を置いている。演習では、気管切開の選択等について、本人・家族、介護福祉士、医療職、医師などに分かれてロールプレイをする。動画を視聴し、自分や家族が同じ状況に置かれた場合にどう対応するかを話し合うこともある。

実地研修は、効率よく実施するため、協力先の病院と相談し、1 クールの参加人数を数名に限定し、複数回に分けて実施している。病院の繁忙期や夏休みの時期を避け、また学生が国家試験の勉強に備えるため、9 月から 11 月頃に実施している。

協力先 2 病院のうち、一方の病院では喀痰吸引（気管カニューレ内部、口腔内）について学生 1 人あたり 3 日間程度、もう一方の病院では喀痰吸引（鼻腔）と経管栄養（胃ろう）について3泊 4 日の実地研修を実施している。

卒業生、特に障害児施設に就職した卒業生からは、「実地研修を経験したことで、さまざまな利用者に対応できるようになった」、「自分に自信がついた、自信をもって対応できるため、恐怖心、心配などが少なく働くことができる」といった声が寄せられている。

病院実習・医療的ケア実地研修の実施

（川崎医療短期大学：岡山県岡山市）

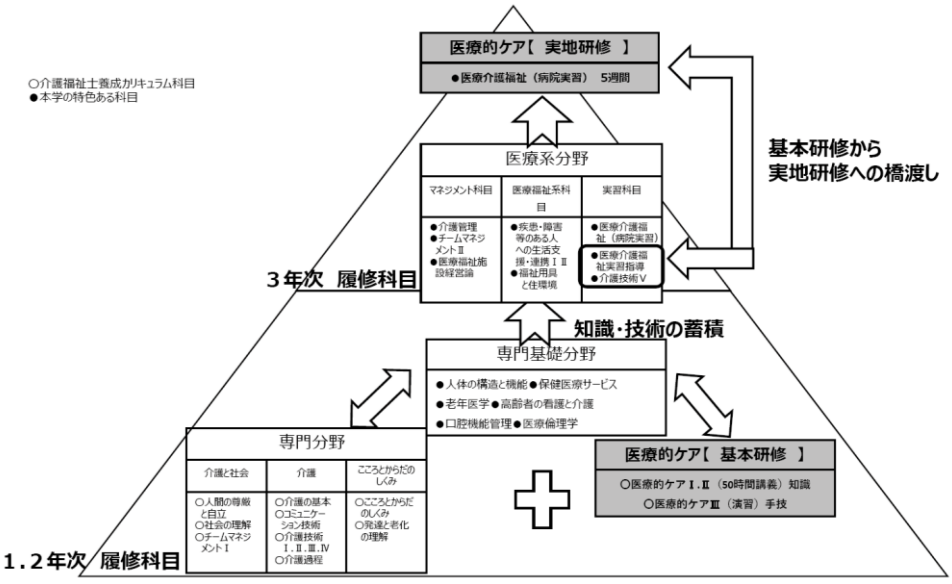
医療に強い介護福祉士の養成を目指し、医療的ケア領域の教育の充実を図っている。医療介護福祉学科は、3年制の課程としており、介護福祉士養成課程の必須科目を2年次までに履修した後、3年次に、病院実習、地域介護実践実習、学校独自科目などを履修するカリキュラムとしている。病院実習では、受け入れ先と連携し、医療的ケアの実地研修を行っている。介護福祉士養成課程で医療的ケアの基本研修を修了しても、就職後に実地研修を受講するのはハードルが高いことから、就学中に実地研修を受けられるようカリキュラムを工夫した。

医療的ケア領域は、1年次後期から2年次までの医療的ケアⅠ、Ⅱの基本研修（講義）によって知識を獲得し、2年次後期の医療的ケアⅢの基本研修（演習）によって手技を習得できるように科目を配置している。実地研修に向けた橋渡しとして、3年次に「医療介護福祉実習指導」を実施し、実技テストによって一定のスキルを身に着けていることを確認した上で、実地研修に送り出すこととしている。

病院実習は、リハビリテーション病棟や地域包括ケア病棟で5週間実施し、医療的ケアの実地研修と担当患者への介護過程展開を行う。

実地研修導入の2年前から、教員数名が自ら基本研修と実地研修を受講し、学生が研修を受ける際の課題を整理した。また、実習に協力してもらえる病院の開拓を行い、実習指導者資格の取得を依頼した。協力病院の開拓は難航したが、近年、病棟で勤務する介護福祉士が増加していることもあり、粘り強く交渉をしたことで、協力が実現した。

＜「医療的ケア」を加えた授業カリキュラム＞



（塩見他, 2021,「介護福祉士養成課程における「医療的ケア」教育の試み：介護の専門性の意識づけと実地研修の実施にむけて」『川崎医学会誌』）

＜医療と福祉の連携＞

看護学生と共に学ぶことによる他職種への理解促進

（北海道医療大学：北海道石狩郡当別町）

医療と福祉の連携を意図し、１学年後期の必修科目として「看護福祉学入門」を開講している。福祉マネジメント学科（以下「福祉」という。）と看護学科（以下「看護」という。）の学生がグループを形成し、「生・老・病・死」の４つのテーマに関する講義と体験を通してディスカッションを行う。

例えば、「生」の授業では出生前診断について学ぶ。「死」の授業では訪問看護師から看取りに関する話を聞く。納棺師を招き、希望者が実際に棺桶に入ることもある。これらの学びや体験を踏まえ、最後に倫理に関する講義でまとめる構成になっている。

「生・老・病・死」に関する知識がまだ十分ではない１学年の時に、両学科の学生が共に考え、学ぶことの意義は大きい。福祉の学生は、医療の基本を学ぶことで、医療機関との連携の重要性や病院で亡くなることの具体的なイメージを持つことができる。一方、看護の学生は、在宅での看取り等を学び、その人らしい暮らしや生き方について考える視点を得ることができる。また、福祉の学生の自由な発想や幅広い視点、看護の学生の明確な目的意識等、お互いの長所に気づき、学び合うことができる。

看護の学生に比べて福祉の学生は人数が少ないものの、グループワークでは自分の意見を積極的に発言している。学生の頃から多職種との関わりを経験することで、卒業後の就職先における多職種連携の実践に役立つものと考えられる。

＜ICT など最新機器についての学びの提供＞

授業における ICT や AI の積極的な活用

（東洋大学：東京都北区）

介護分野における ICT や AI の最先端の技術に対応し、介護現場をリードできる人材を育成するため、ICT や AI を活用した機器に関する教育を積極的に行っている。「生活支援技術」の移動に関する介護授業の中で取り上げている。

授業では、学生が理解しやすいようまずは福祉器具を学ぶところから始めている。また、教員は ICT や AI を使用した機器を単に紹介するだけではなく、その使用方法や解析方法まで教えており、利用者の身体の状態を把握し、根拠をもった介護を行うことができるよう教育している。

その結果、学生は ICT や AI を使用した福祉用具を活用することで、利用者に与える影響も考えて行動することができる。また、ポイントを押さえた授業が心がけられているため、自主学習を通じて知識を定着させる等、学びの習慣も身につけている。

現在のところ、大学で学んだ ICT や AI を使用した機器が活用されている事業所は多くはないものの、将来、利用者のより良い生活につなげるための ICT や AI の活用について、職場で伝えていこうとする意欲の向上にもつながっている。

加えて、社会福祉士とのダブルライセンス取得を目指すことで、ソーシャルワーク教育の視点等さまざまな角度で学び、ものごとを考えることができるような人材の育成を行っている。

＜ICT や AI を用いた福祉器具の活用の様子＞

左：スマートフォン 2 台を用いた、OpenCap のデータ計測環境の例

右：ORPHE CORE を取り付けている場面

＜地域づくりへの積極的な関与＞

地域をフィールドとして少人数で学ぶ「地域活動研究」を実施

（北海道介護福祉学校：北海道夕張郡栗山町）

卒業研究のあり方を見直す中で、教員の福祉・介護・医療看護の専門性を活かし、栗山町をフィールドとした学びの機会を作りたいと考え、学校独自科目として「地域活動研究」を開始した。「地域問題解決グループ」「生活支援グループ」「ヘルスケアグループ」の中から、学生が選択して所属し、大学のゼミのような活動を行っている。

これまでの活動例として、地域問題解決グループでは、障害のある人の社会的な障壁をどう取り除くかをテーマとした研究を行った。ヘルスケアグループでは、町内のまちづくり協議会と連携しながら、老人クラブと連携して健康福祉講座を行ってヒアリングを行うなどといった研究をした。生活支援グループでは、ファブラボ栗山という町が運営するものづくり工房で、3D プリンタを使って、避難所でベッドがない時に、段ボールでベッドを作るためのジョイントを考案するといった活動を行った。

地域活動研究を通し、地域の中で養成課程での学びを実践する機会になり、また、地域で暮らす方の生活の様子を知ることで、健康維持や介護予防などの視点を持つことにつながっている。加えて、町内会や老人クラブなど地域の団体と関わる機会が増加し、地域の人に、学生のことを知ってもらう機会となっている。

地域でのフィールドワーク等を通じた学生の満足度向上

（いばらき中央福祉専門学校：茨城県水戸市）

カリキュラム変更をきっかけに、養成施設の教員が地域に出ることの重要性に気づき、教員が学生を巻き込みながら、地域住民と積極的に関わっている。

例えば、2019 年から NPO 法人を立ち上げ、「”シニアが元気”はいいことだ！」を掲げて活動を展開している。地域に元気高齢者が増えている中で、地域に根差した学び合いの場を通して、シニア世代が益々元気で活躍できる場づくりをしている。そのプロセスを教員と学生が一緒に取り組むことで、血の通った教育を提供している。

また、「コミュニケーション技術」の科目でフィールドワークを取り入れている。例えば、地域の空き家問題について学ぶ時は、実際に地域の空き家を見てきてもらう。その他、古民家を再生しカフェを併設する分校（ありが分校）に、地域住民が集まっている状況を活かし、地域住民（神社の宮司など）へのヒアリング等を行い地域課題について学ぶことを授業の一環にしている。

なお、活動の際は、日本人も外国人も一緒のチームをつくっている。また、コミュニケーションが苦手な学生がいるチームには自然な形で教員がサポートし、お互いが支え合い、認め合う体制をつくっている。

これらの取組の結果、学生の授業に対する満足度が向上しており、共生社会の担い手である介護福祉士の育成に役立っている。

（ありが分校での活動）

（フィールドワークの様子）

（いばらき中央福祉専門学校資料）

＜外国人留学生へのきめ細やかな支援＞

留学生の日本語学習支援・日本人学生とのサポート関係構築

（聖隷クリストファー大学介護福祉専門学校：静岡県浜松市）

留学生が介護福祉士国家試験に合格するためには、日本語能力の向上が必須の条件となる。同時に、介護現場で外国人介護人材の受入れが進む中、留学生と積極的に関わりあいを持つことは、日本人学生にとって、就職後の介護現場に近い環境を経験することができるというメリットがある。

そこで、留学生が日本語能力を伸ばすとともに、日本人学生からのサポートを受けられるように、留学生の数は、定員の半数を超えないようにしている。留学生には、校内ではどんどん日本語で話して日本語能力を集中的に上げる努力をしてもらっている。学校としても、毎週特別授業（週ごとに日本文化の学習、相談対応など）を行うなどの支援を行っている。

また、国家試験直前期には、試験勉強のために学生が利用できる「缶詰ルーム」を開設し、学生同士で教え学びあう場の提供をしている。

日本人学生が留学生をサポートすることで、両者にとって、学習の定着やモチベーションの維持につながっている。また、「缶詰ルーム」は、冬季における暖房代の節約という側面からも、留学生に好評を得ている。

＜留学生への相談対応の様子＞

（聖隷クリストファー大学介護福祉専門学校資料）

各段階における日本語レベルの目標設定と独自教材の開発

（若狭医療福祉専門学校：福井県三方郡美浜町）

留学生の日本語能力の向上のためには、留学生に関わる教員間で意識・指導を統一することが重要であると考え、本校では、教育の各段階で目標とする日本語レベルを設定するとともに、独自教材を開発し、教員間で共有している。

日本語レベルの目標設定については、来日前に日本語能力試験（JLPT）の N5レベル、来日から日本語学校進学を経て本校進学までに N3 レベル、その後介護用語に対する理解力が高まる N2 レベルに達することとしている。本校では、介護と日本語を同時に上達させることを特に意識して指導に当たっている。

独自教材については、国家試験でよく出題される概念・用語を分析して抽出し、それらを学ぶための画像やイラストを交えたスライドと、スライドを説明する日本語の音声がセットとなった教材を開発している。音声のスピードは、留学生の理解度に合わせて調整することができるようになっている。

これらの取組により、教員によって留学生に対する指導方針や説明方法が異なるために留学生が混乱するなどのケースを防止することができている。また、段階的・確実に日本語で介護を学ぶツールを整えることで、留学生が途中で脱落せずに学習を続ける支えとなっている。

養成施設における日本語教師の採用

（いばらき中央福祉専門学校：茨城県水戸市）

法人内の介護施設で技能実習生を受け入れた経験から、また、日本語が上達しなかったために帰国した人の話を聞いて、日本語教育の専門性をもつ人材による教育の重要性を痛感していた。そこで、6 年前に求人誌で日本語教師を募集したところ、3 か月程度で1名を採用することができた。

採用当時は本校で外国人留学生を受け入れる前だったので、最初は法人内の介護施設で就労する技能実習生の指導等を担当していた。現在の主な仕事は4つで、①本校留学生の指導（日本語能力試験 N2 の合格）、②国家試験の勉強のサポート、③県内介護施設の外国人材及び日本語職員の支援、④海外現地での学生募集の際の通訳等である。

現在のところ、世の中で日本語教師の専門性が十分に認められているとはいえず、日本語教師のキャリアアップが課題となっている。そのため、日本語教師の仕事が確立している好事例として、大学の日本語学科からフォーラム参加の依頼を受けて登壇したこともある。

＜福祉経営の学びを通したリーダー人材の育成＞

独自科目の展開「福祉経営とリーダーシップ」

（静岡県立大学短期大学部・社会福祉学科　介護福祉専攻：静岡県静岡市）

本学では、平成 29 年度のカリキュラム改正以前から「福祉経営とリーダーシップ」という独自科目を2年生後期に開講している。介護施設の経営・人材育成やチーム力向上のための組織論、課題解決に向けたマネジメント・リーダーシップなどについて学修するもので、社会福祉学を基盤に介護福祉事業や実践をどのように経営的に捉えるかという観点を重視しているため、「介護経営」ではなく「福祉経営」という名称となっている。

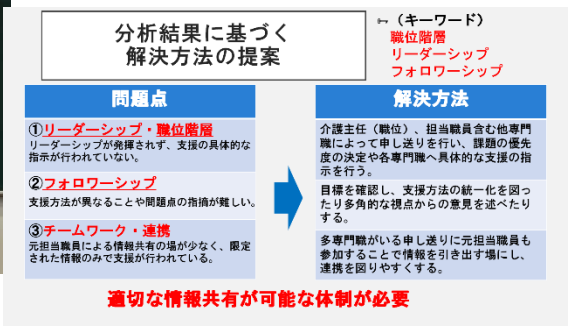
この授業では、実際の介護事業における組織活動をケースメソッドに、課題分析・解決策の議論をチームで行うとともに、最後の授業でプレゼンテーションを行う。チーム（3 人構成）組成は学生自身で行い、リーダーの立候補、リーダーによるチームメンバーの選定、教員からリーダー、リーダーからメンバーへの情報伝達など、組織活動の疑似体験をすること等の工夫を行っている。

講師は2人体制で、福祉人材センターの実務経験者に協力してもらうことで、シラバス全体の流れや狙いを意識したゲストスピーカーの人選・依頼も可能となっている。（例：災害対応としてのチームマネジメントを学ぶ授業で、静岡県災害派遣福祉チーム（DWAT）の活動経験のある介護福祉士が登壇する等）

この授業を通じて、学生は介護実習の経験等を振り返りながら組織活動としての福祉経営やリーダーシップを学ぶことができる。

介護実習は、利用者と職員の間のケーススタディを扱うことが多いが、この授業を通じて、ひとりの介護福祉士の立場からの考察にとどまらず、チーム活動として俯瞰して見る視点を学び、より高い視点から介護福祉士としての自らの役割や進路を考えることができるようになる。

＜学生による発表と作成スライド＞



（静岡県立大学短期大学部資料）

＜研究の基礎、「書く力」や「根拠を説明できる力」の育成＞

介護福祉に必要な研究的視点を養うための独自科目「研究」

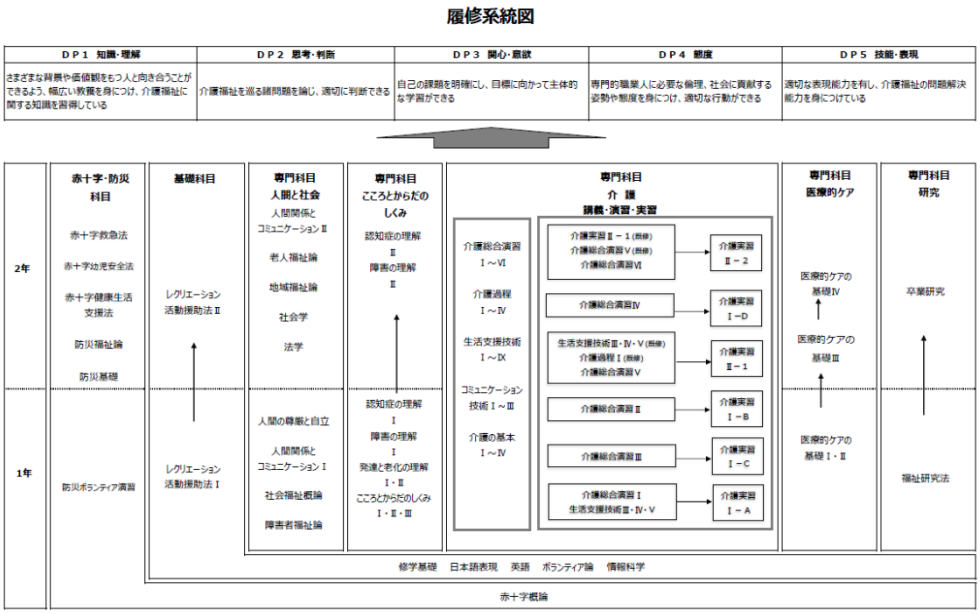
（日本赤十字秋田短期大学・介護福祉学科：秋田県秋田市）

学生が卒業後に現場で研究を進める上での基礎になるものとして、福祉研究法の中で研究とは何かなどの、基本的な学びをする必要があると考えている。

そこで、個々の学生が、自分は何に興味を持っているのか、何を解決したいのかという問題意識をしっかりと持つことを目指し、1 年次後半に、講義や課題への取組を通じて基本的な研究について学ぶ機会を提供している。2 年次には、1 年次で問題意識を持ったことに関して考えを深め、本格的に何をテーマとしたいのかを明確化し、研究計画を立てて研究に取り組み、その結果を発表する。テーマを絞り込んでから発表までは 8 か月程度となっており、学生1、2 名につき教員が担当となり、手厚いサポートを行っている。

研究テーマは、防災関連のほか、介護職のストレスの問題や技術、障害など多様であり、学生が幅広い興味を持っていることがわかる。

自らの関心を言語化し、研究を実施して発表するという一連のプロセスを踏むことで、学生自身、大きな達成感を得る経験にもなっている。



＜介護福祉学科履修系統図＞

（日本赤十字秋田短期大学資料）

卒業後を見据えた「書く力」「根拠を説明できる力」の育成

（桃山学院大学：大阪府和泉市）

学生に「書く力」を身に着けさせるため、1年生の時から、授業を振り返り 300 文字で考えをまとめるという課題を出している。学生個人で書かせるだけではなく、学生同士で意見交換をしながら進めることで、徐々に現場のケアカンファレンスのような様子になっていく。

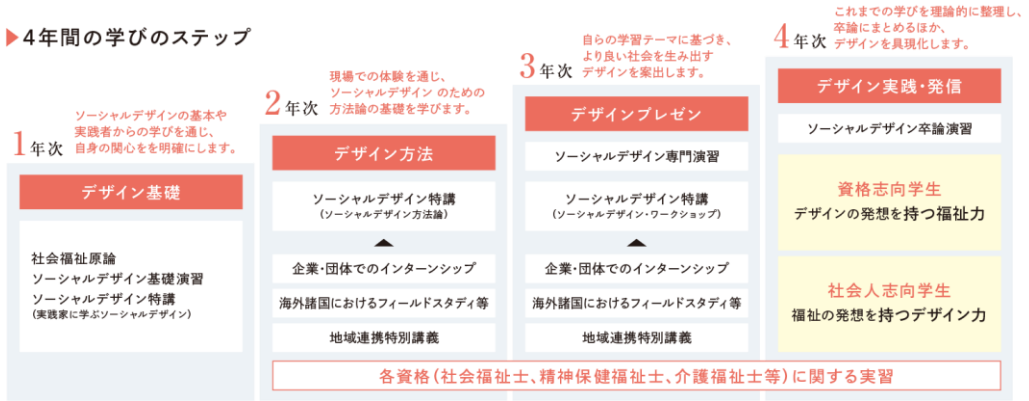
また、実習終了後には、実習報告書を記載させている。最後の介護実習の終了後には、自分が実習で関わった利用者についてのアセスメントや介護計画・実践を振り返り、そこから得られた学びを一般化して抽出できるようにし、最終的にはその学びを基に 5,000 字の論文に仕上げられるよう指導をしている。

指導中で、特に重視しているのは、問題に気づく力、それを言語化する力、根拠に基づいて説明する力である。根拠を説明できることは、介護現場における本人・家族への説明、多職種協働やチームケアにも必要であり、それを事例研究で教えている。

さらに、どの現場でも新人の時から研究発表をすることが求められるため、卒業後を意識して、PPT の作成方法や話し方など、プレゼンテーション能力を高める方法も教えている。

このような取組の結果、本学の介護福祉士養成課程の学生は、3・4年生になると、授業や実習の要点を簡潔な文章で表現できるようになり、教育の効果がみられる。

＜4年間の学びのステップ＞



（桃山学院大学資料）

＜災害介護に関する授業の導入＞

防災に関する科目の導入

（日本赤十字秋田短期大学・介護福祉学科：秋田県秋田市）

日本は少子高齢化が加速しており、災害時や防災に関しても、今後は生活に視点を置いた高齢者あるいは障害者の介護が必要かつ重要になっていくものと考えられる。そこで、本学ならではの必修科目として、防災に関する科目を取り入れている。

2 年次前期の「防災基礎」では、災害や被災者支援に関する基本的な知識を学ぶとともに、ライフライン停止時の介護活動、被災フェーズごとの支援、災害時の多職種連携、介護施設の役割（BCP）などについて演習を含めて修得していく。

その上で、2 年次後期の「防災福祉論」では、グループワークとロールプレイを中心に前期に学んだ内容の実践をしていく。近年、風水害の発生が非常に多いことを踏まえ、介護施設内での水平・垂直避難、避難先での支援などを題材としている。

防災科目を初めて実施したのは平成 22 年度であったが、平成 23 年 3 月に東日本大震災が発災し、同年度に卒業した学生は、ちょうど震災前日に卒業式を迎えた。卒業生からは、就職後も施設では停電や余震があり、夜中巡回などで、学んだことが役立ったという声を聞いている。

授業内での「避難所運営ゲーム」の実施

（白梅学園大学・子ども学部　家族・地域支援学科：東京都小平市）

学生が介護福祉士になった際に、非常時の対応やケアの在り方について考える能力を養成するために、授業の中で「避難所運営ゲーム」を実施している。

「介護の基本Ⅱ」という授業において、災害時に介護福祉士果たす役割についての講義をしたのち、２コマほどを使って、白梅学園大学が避難所になり、市民が避難してくるという想定で、医療の要否や収容する場所を瞬時にトリアージするという演習を実施している。

＜「避難所運営ゲーム」の様子＞

（白梅学園大学資料）

具体的には、男女一緒の部屋でよいか、認知症の方についてどう処遇するのか、亡くなった赤ちゃんを抱えてきた方が来た場合にどう対応するか、という受け入れ時の判断や、避難所を維持する中で、タバコを吸いたい等収容者から上がってくる要望への対処方法の判断を迫られることになる。

なお本来は１回あたり３時間程度かかるゲームであるが、講義用に１時間程度で終了する「小平版」を作成・使用している。

学生たちが、非常時介護福祉の現場で発生することについての具体的なイメージを得られるようになっており、その後介護福祉士として働くことになった際に、災害について自分事として捉え、非常時の対応方法を考える力を養成している。

＜家族全体をみる視点の養成＞

家族や世代のつながりに関する学びの機会の提供

（白梅学園大学・子ども学部 家族・地域支援学科：東京都小平市）

学生が、利用者だけでなく、家族全体の問題として捉えられるように、家族や地域を取りまく概念として世代間のつながりについて学ぶ機会を提供している。

「現代家族論」という科目は、少子化や LGBTQ といったテーマも含め包括的に家族という概念を扱い、現代家族の在り方を発表・議論する授業となっている。

また、「世代間交流論」「世代間交流演習」という科目では、世代間交流についての理論や国内外での事例についての講義や発表・議論の他、「コミュニティカフェ」という地域在住の高齢者との交流の場を企画・運営する演習が行われている。2024 年 12 月 4 日（水）にも「コミュニティカフェ」が開催され、一緒にペットボトルでスノードームを作る、という企画が行われた。

また、家族介護者を対象として継続的にかかわる認知症重度化予防教室を、介護付きで開催しており、介護福祉士を目指す学生が認知症の人とその家族との関わりについて実践的に学んでいる。

その他「ヤングケアラープロジェクト」とも連携し、毎月1回、白梅フードパントリーの開催日に、ケアラーサロンを開催している。大学生や併設の中学・高校の生徒、地域の民生・児童委員、地域包括支援センター職員、コミュニティソーシャルワーカー等の参加もあり、世代をこえた繋がりのなかで、家族や地域を取り巻く課題に取り組んでいる。

各科目の履修を通して、介護福祉について、家族という視点や世代間交流という視点の中での位置づけの理解を促しており、カリキュラムを通して、利用者と自分という視点を超えて、家族全体をみる視点を養う機会を設けている。

＜コミュニティカフェで手形アートに取り組む様子＞

（白梅学園大学資料）

＜実習の充実＞

基礎実習に「シャドーイング」を導入したことで、介護福祉士取得希望者が増加

（富山短期大学：富山県富山市）

初めての実習である基礎実習Ⅰ-1は、「介護の仕事の魅力を感じること」を学習目標としているが、以前は実習を経て介護に対してネガティブな印象を持つ学生が見られた。そこで、学生が楽しく安心して取り組めるよう工夫し、学習意欲の土台を築きたいと考え、基礎実習Ⅰ-1に「シャドーイング」を取り入れた。

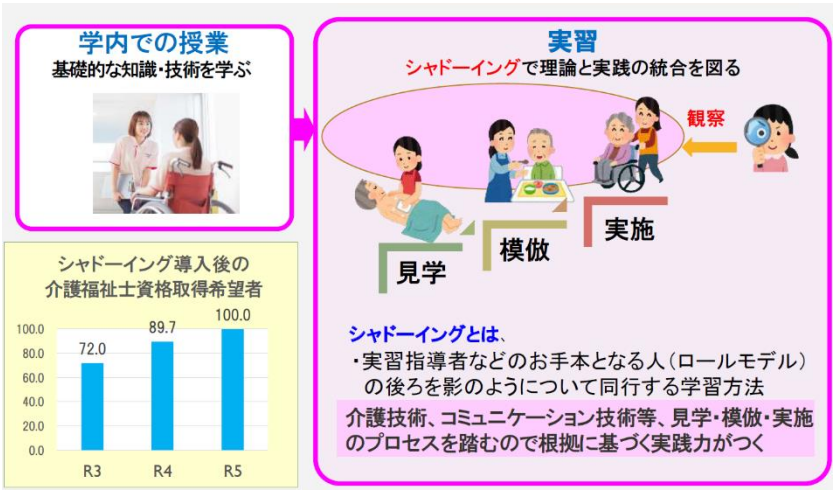
シャドーイングとは、実習指導者などのお手本となる人（ロールモデル）の後ろについて同行し、お手本となる人の行動を見て学ぶ学習方法で、新人看護師の研修手法としても活用されている。実施時のポイントは、①学習の目的・目標を共有する、②学生に今からすること／したことを簡単に説明する、③ロールモデルのすぐそばで見せる、④学生がその日に学んだことを振り返る時間を作る、以上4点である。

学内での授業にて基礎的な知識・技術を学んだ後に、シャドーイングを取り入れた実習を経験することで、見学・模倣・実施のプロセスを踏んで、根拠に基づく実践力を習得することができる。

実習指導者に対しては、実習前の実習指導者会議（オンライン開催）にて、毎回、シャドーイングの目的やポイントについて、丁寧に説明を行っている。実習指導者にも、「実習で介護の魅力を正しく伝えたい」という問題意識があったため、実習の新しい実施方法を受け入れてもらうことができた。

シャドーイングを導入したことで、学生が安心して実習に臨むことができ、介護の楽しさを実感する機会が増えた。学科には福祉ビジネス分野の課程もあり、介護福祉士資格取得は必須ではないが、シャドーイングの導入後、資格取得希望者が増加し、令和5年、令和6年は健康福祉学科の学生全員が介護福祉士資格取得を希望している。加えて、実習指導者にとっても、改めて仕事の意味や意義に気づく機会となっている。

＜シャドーイングを取り入れた実習＞



（富山短期大学資料）

＜学習環境の整備＞

実習先の介護現場に近い学習環境の整備

（東洋大学：東京都北区）

学校の授業の中で、あらかじめ実習先と同じバージョンの器具に触れることができるよう、設備や備品、実習用器具の充実を図っている。

例えば、本学の教育の中で「歩行」が重要視されていることもあり、さまざまな種類の歩行器が揃えられている。学生の関心を高め、将来に向けた学びになるような環境を整えている。

2年生の春学期の授業では、実習で使用する前に福祉用具に関する理解を深めておくため、グループにわかれて福祉用具に関する「調べ学習」を行っている。学生は、移動器具（車いす・歩行器・移乗リフト）、住宅改修、お風呂、トイレ、食事に関する福祉用具等の中から、関心のあるものを選んで調べていた。実習先で使用する福祉器具を知り実際に触ることで、知識の確実な定着につなげている。

また、実習室では、実習と授業を同時に行うことができるようになっており、学んだ内容をその場で実践することができる。実習室にはモニターも設置されており、インターネットで調べたものをその場で共有しながら学ぶこともできる。

＜入浴介助の様子＞

（東洋大学資料）

＜教員や先輩との密な関係づくり＞

教員によるチューター制度を通じた手厚いサポート

（静岡県立大学短期大学部・社会福祉学科　介護福祉専攻：静岡県静岡市）

１人の教員が４人程度の学生の「チューター」となり、大学生活（授業・人間関係・国家試験対策・進路など様々な側面）において、きめ細やかな相談支援を行っている。短期大学の強みは短期（2年間）で介護福祉士を養成することであるが、教養科目や研究活動など大学ならではの科目を含むカリキュラム構造において、個別的かつ伴走的な教育支援が求められている。

チューターである教員と学生の関わりは、１年次の履修登録の際に、「どの教養科目を履修すればよいのか」という相談に乗るところから始まることが多い。「どうやって勉強すればよいか分からない」と悩む学生に対しては、チューター自身が使っていた参考書を見せて、参考書の選定方法や書き込みの仕方、そして理解度や定着度を高めるために繰り返し読む（解く）ことなどを具体的かつ親身にアドバイスすることもある。

学生によってつまずくポイントは様々であるが、身近に相談できる教員がいることで、個々の学生に寄り添うことが出来ており、学生の安心感にも繋がっている。それぞれのチューターは、学生について気になる動向などがあれば、適宜他の教員とも共有しており、組織としてチューター制度が機能している。

また、チューターとその担当学生が集まる「チューター会」の開催により、１年生と２年生との交流や相談・アドバイスなどの機会も創出している。

教員の丁寧な指導やポロシャツの支給等による一体感の醸成

（東洋大学：東京都北区）

本学では1学年の定数は40名で、学生たちは同じ授業を一緒に受けることが多く、教員と学生が授業や実技指導、実習巡回の中で直接話す機会も多い。教員は学生一人一人と向き合った丁寧な教育を行うことができ、学生と教員の距離は近い。

また、スクールカラーの紺色で統一したポロシャツが配布されており、学生と教員はおそろいのポロシャツを身に着け、実習や実技に取り組んでいる。本学では無料でポロシャツが配布されており、学生は１年生と３年生のときにそれぞれ２枚ずつ、４年間で計４枚のポロシャツを受け取っている。周囲と同じポロシャツを着用することを通じても一体感が感じられる。

教員からの丁寧なサポートを受けつつ、仲間と一体となって取り組むことができる環境を生んでおり、介護福祉士養成課程に在籍している学生の満足度は高く、介護福祉士養成課程全体の雰囲気の良さにもつながっている。

＜おそろいのポロシャツを着た実技の様子＞

（東洋大学資料）

TA などの先輩と触れ合う機会の提供

（東洋大学：東京都北区）

学生たちの学習意欲の向上につながるよう、1、2年生の授業に3、4年生の学生が教員の TA(ティーチング・アシスタント)として参加している。

TA 制度は本学全体での取組であり、教員の授業のサポートを行う。本学では、生活支援実技の科目のような実技指導でデモンストレーションを行う際の相手役として、3、4年生が TA となり下級生の授業に参加している。

TA を担当する学生は、授業前に行う機器の準備のサポートや授業前後の質問対応も行っている。上級生から教えてもらうことができるため、下級生の学習にも良い影響を与えている。

本学では、TA を採用したいと考えている教員は、毎年 8 月くらいに翌年度の採用予定を大学に申請している。1 回 90 分のアルバイトではあるが、給料が発生するため学生は責任をもって取り組むことができる。

TAとして働く上級生の姿を見てあこがれを感じた1、2年生もおり、3、4年生になった際にTAに申し出ることもある。

また、TA として下級生の授業に関わる学生にとっては、過去に習った内容の復習にもつなげることができるため、介護福祉士国家試験対策にもつなげることができる。

社会で活躍する介護福祉関係者による授業内講演

（白梅学園大学・子ども学部 家族・地域支援学科：東京都小平市）

学生が介護福祉に対する見方・イメージを変えて、その後の履修に活かせるよう、卒業必修科目として「人間の尊厳と自立」を１年生前期に設置している。授業内では、介護福祉士として起業し事業所を運営する傍ら自らの活動を発信する経営者や、認定介護福祉士、国内外で医療介護に関する幅広い講演活動を行う方など、社会で活躍している著名な介護福祉関係者等をゲスト講師として招いている。また社会的活動を行う本校の卒業生が非常勤講師を担っている。

授業の中で、事例や写真を示しながら、具体的なイメージがつくように現場における取組について紹介されており、学生たちが通常の講義では得難い、実際の介護福祉や介護福祉関連の仕事に関する具体的なイメージを得られるようになっている。

また、当該科目を１年生の前期に開講することで、学生たちが介護福祉の持つ意義について認識し、介護福祉関連の仕事に対しての見方を改める機会となっており、学生たちが、後期以降実施される専門的な各科目を学ぶ意欲を醸成し、視野を拡大することに貢献している。

＜介護福祉関係者による授業内講演の様子＞

（白梅学園大学資料）

(2) 介護福祉士国家試験対策

＜学びの確認・定着が導く国家試験合格への道のり＞

学びの習熟度・定着度を確認するための介護福祉士国家試験対策

（静岡県立大学短期大学部・社会福祉学科 介護福祉専攻：静岡県静岡市）

本学では、2 年次の通年科目「介護福祉演習」（30 コマ）を通じて、介護福祉士に必要な知識の総括を行っている。個々の専門科目の繋がり（相互関係性）を重視し、きめ細やかな学習支援によって習熟度・定着度を上げることが、結果として国家試験対策につながるという考え方に基づくものである。なお、年 3 回の模擬試験や介養協学力評価試験を定期試験としている。

授業は講義形式で、演習問題の効果的な学習法を指導している。7 月に行われる最初の模擬試験の結果をもとに、8月上旬からは習熟度別にグループ分けをしている。

模擬試験の結果によって再試験や補習も実施している。特に、毎年 1 月には、模擬試験の結果が良くなかった学生に集中的な補習を行い、最終的な底上げを図っている。

主な担当教員は 4 名で、加えて 2 名の教員も協力している。大学内には介護福祉士国家試験対策検討委員会が設置されており、試験結果を踏まえて対策を検討し、「介護福祉演習」のカリキュラム等に反映される形となっている。これらの取組の結果、本学は国家試験合格率 6 年連続 100%を達成している。

（参考：第 36 回介護福祉士国家試験受験率 100%、合格率100%）

アウトプットによる学習成果の定着

（聖隷クリストファー大学：静岡県浜松市）

国家試験対策は、対策講座を受けて、過去問題を繰り返し解くなど、インプットの要素が多く、介護の学びを深めることにつながりづらい。そのため、4年次の春学期に、アウトプットの要素を取り入れることで、大学における学習成果を定着させ、国家試験対策につなげていくための独自科目「介護福祉実践演習」を行っている。

「介護福祉実践演習」では、学生が 3 人程度のグループに分かれて、「こころとからだのしくみ」から一つの疾患（例：糖尿病）を選択し、これまで学んだ知識などを整理して、他の学生に対して 30 分間の授業をする。その後、その疾患に関連する過去問題にチャレンジする、という流れで授業が進んでいく。

この科目を導入した頃から、国家試験の合格率 100%が実現できるようになった。他の学生に説明する、授業をするというアウトプットを通じて、選択した疾患に限らず、関連する知識を含めた学習内容が定着していく。また、4年次の春に、国家試験にチャレンジしてもらい、「こんなにできないんだ」と認識してもらうことで、残りの期間でその克服に集中できるようになっている。さらに、学生は、実習時に関わった利用者や自らの家族が抱えている疾患など、自ら何らかの体験があり、生活しづらさまで知っている疾患を選ぶことが多く、学びと体験が統合され理解が深まるきっかけにもなっている。

（参考：第 36 回介護福祉士国家試験受験率 100%、合格率 100%）

＜外国人留学生のサポート＞

「留学生アドバイザー」が外国人留学生をサポート

（いばらき中央福祉専門学校：茨城県水戸市）

留学生の学習支援のため、留学支援アドバイザーとして活躍している卒業生（ベトナム出身１名、ネパール出身１名）が、授業で同時通訳をするなど、留学生のサポートをしている。

母国語を交えた授業に参加し、先輩の経験に基づく助言を受けることで、留学生の学習意欲と理解度の向上に役立っている。また、教員の負担軽減効果も大きい。

- 留学支援アドバイザーA さん（ベトナム出身）のコメント

本校の隣にある特別養護老人ホームに入職し３年目で、今はショートステイで働いています。今年の８月から、初任者研修の「認知症の理解」の科目を養成施設の先生と一緒に教える仕事もしています。

介護福祉士国家資格の勉強は、自分の将来のために、途中であきらめずに頑張りました。日本語のカタカナを覚えるのが難しかったですが、勉強するのが楽しかったです。

- 留学支援アドバイザーB さん（ネパール出身）のコメント

自分が１年生の時は校内のテストに合格しないこともありましたが、介護福祉士国家試験に合格するために日本に来たという当初の目的を思い出し、「できない」ではなく「頑張ればできる」と思って努力した結果、合格することができました。同期生も皆優秀なので「みんなで合格したい」「負けたくない」という気持ちがあり、頑張ることができました。

（参考：【留学生以外】第 36 回介護福祉士国家試験受験率 100%、合格率 92.6%
【留学生】第 36 回介護福祉士国家試験受験率 100%、合格率 70%）

外国人留学生向けが頑張るきっかけづくり

（いばらき中央福祉専門学校：茨城県水戸市）

外国人留学生の介護福祉士国家試験の合格率を高めるため、留学生のみの国試対策を２年間で109コマ実施している。日本人と合同の授業をあわせると428コマ(1コマ90分)となる。

国家試験対策では、『見て覚える！介護福祉士国試ナビ』を用い、ページに合わせたオリジナル問題(467 問。日本語)を使用している。介護の現場に出た時にいつも書類にルビがあるとは限らないのでルビ無しとし、留学生にとって区別が難しい日本語(例：「非常に少ない」「まれである」)の説明や、日本語の趣旨を理解するためには文章を最後まで読むことが必要であること等を指導している。留学生本人から「カタカナが覚えづらい」と聞いて、オリジナル問題で、カタカナの用語(例：アドボカシー、インフォームドコンセント)だけの問題を作成したこともある。

また、定期的に留学生対象の模擬試験も行っており、高得点を取った学生へのお米プレゼント、模擬試験の費用補助など、勉強とアルバイトを両立している学生を支援するための多様な取組をすることで、高い水準の合格率を維持することが出来ている。

＜外部講師の導入＞

国家試験対策講座への外部講師の導入

（聖隷クリストファー大学：静岡県浜松市）

学内の教員による国家試験対策の課題として、教員は、試験に出る部分に限らず、養成校で介護を学ぶ学生に知っておいてほしいことを教える傾向があること、教員の問題意識の強い部分を手厚く教えるなど多少の濃淡が出ることがある。また、学生側も、授業での既習範囲については、教員に初歩的な質問をしづらい心理状況がある。

そこで、10年ほど前から、介護福祉士国家試験対策講座に、社会福祉協議会を通じて、認定介護福祉士、ケアマネジャーなど介護の現場で働く方々に外部講師として来てもらっている。教員は科目を網羅的に教え、外部講師は総合問題を読み解くコツや模試の成績が思わしくなかった弱点分野を中心に教えるという役割分担をしている。

学生は、普段から接している教員ではない第三者的な立場の外部講師から指導を受けると、試験対策のスイッチが入る。また、教員にとっても、教え方や伝える切り口について新しい発想を得るチャンスになっている。加えて、実際に介護の現場で働いている先輩に来ていただくことで、学生が介護福祉士を取得した後のキャリアモデルを描きやすくなり、国家試験合格のモチベーション向上にもつながっている。

（参考：第36回介護福祉士国家試験受験率100%、合格率100%）

(3) 教員の資質向上

養成施設の教員の資質向上については、公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会（以下「日本介護福祉士養成施設協会」という。）の活動として、全国教職員研修会が毎年開催され、また、ブロック単位での情報共有や教材研究が行われています。その上で、各養成施設による取組が進められています。

例えば、日本介護福祉士養成施設協会北海道ブロック会では、令和 7 年 2 月、「災害・緊急時に備えた介護福祉士養成教育の拡充」をテーマとした教職員研修会を開催しました。介護福祉士養成に関する全国動向やトピックを共有することによって、毎年のように見舞われる自然災害のたび、甚大な被害とその影響を直に受けた方々へ寄り添う介護福祉士の役割・存在の大きさを再確認する機会となっています。

教員同士のピアレビューによる教育の質向上

（聖隷クリストファー大学：静岡県浜松市）

教育の質を高めるための取組として、各教員は、年に2回以上、他の教員から授業のピアレビューを受けるとともに、他の教員のピアレビューをすることとしている。当初は、FD（Faculty Development）活動に関心のある教員が自主的に行っていたものであったが、大学からも賛同が得られ、大学全体で実施するようになっている。

ピアレビューでは、レビューを受ける教員（レビューイ）から、レビューをする教員（レビュアー）に対して、予め授業のねらいや展開、見てほしいポイント等を伝える。レビュアーは、国家試験を見据えた授業の難易度や他科目との関連性、学生の既習範囲との整合性などの観点から、授業をレビューする。改善すべき点について指摘があった場合は、授業の改善を行い、改善後の授業に再度レビューを受ける。

ピアレビューの対象授業は、教員間で調整することとなっており、講義予定表を見て「この授業を見てみたい」とレビュアー側から申し込むこともあれば、新たな授業内容に取り組む際などに「この授業の感想・改善点を教えて欲しい」とレビューイ側からお願いすることもある。看護やリハビリテーションなど、他学部の教員も参加する。

ピアレビューにより、教員は自らの授業を見直すとともに、他の教員からコメントやアドバイスを受けることができ、授業の質の向上につながっている。また、他学部の教員ともレビューし合うことで、専門性や分野による違いを体感し、より実感をもって多職種連携を教えることができている。

3. 中途退学を防ぐ

日本介護福祉士養成施設協会の調べによれば、令和 4 年 3 月卒業年次に係る途中退学等の状況(4 年過程を除く)は 17.8%(うち日本人 15.8%、うち留学生 20.7%)となっています。これまでに退学を考えたことのある学生からは、「他の学生との人間関係がうまくいかなかった」「実習で必要となる知識・技術・姿勢等の習得がうまくできなかった」「実習先において人間関係(対職員)がうまくいかなかった」等の理由が挙げられています。

学生の中には、他者とのコミュニケーションに不安を抱えていた李、発達障害や精神疾患等を背景に、支援を必要とする学生もいるため、教員が学生対応スキルの向上に取り組むほか、他部署も含めて学生に関わる職員間で課題を共有し、同じ支援方針で学生に関わっていく必要があります。例えば、入試の合格発表時や入学時点で気になる学生については、高校と連携して配慮事項を確認し、切れ目ない支援を行う事例がみられます。

教職員、家庭、出身高校等の連携による学生支援

(富山短期大学:富山県富山市)

発達障害やその疑いのある学生、精神疾患を抱えている学生、出身高校や家族、本人から特別な支援を求められた学生など、支援を必要とする学生が毎年数名いる。学習上の課題がある学生に対しては、クラス担任、ゼミ担任、分野別教員により多面的な支援を行い、学科の会議で情報を共有し、必要に応じて家庭とも連携している。

学科での学生支援は、相談受理、アセスメント、支援方法決定(複数のメンバーで決定)、支援、モニタリング(振り返り)といった流れで進み、教務部・健康支援センターとの連携・情報共有を行いながら取り組んでいる。

発達障害や精神疾患など生きづらさを感じている学生に対しては、本人からの申し出を受けてクラスメイトの理解促進に取り組み、また、全教職員が合理的配慮に取り組むなどした。心身に不調を感じている学生には、医師の指示のもとオンライン聴講も可能にするなどの対応をしている。出身高校を訪問して個別対応の相談を行ったこともある。

これらの取組の結果として、直近3年間では、休学者や中途退学者は1人もいない。4年前に中途退学者がいたが、健康上の問題で学業の継続が難しくなった学生だった。一方、毎年の支援体制の構築や、プライバシー保護に配慮しながら関係部署と情報共有や共通の対応を行っていくことに、課題を感じている。

多様な選択肢・相談先の提供

（聖隷クリストファー大学：静岡県浜松市）

介護に関心を持っていても、排泄介助に抵抗があり、1 年生のうちに介護実習に行く自信がないという悩みを抱く学生もいる。学生が抱える悩みや状況に幅広く対応するために、多様な選択肢・相談先を提供するようにしている。

そのために、カリキュラムを改定し、2年生から介護を学び始めた学生や、1 年生で介護実習に行けなかった学生でも、卒業までに介護福祉士の資格を取得できる仕組みにした。また、3年生で行うキャリアプランに合わせたプログラム選択では、社会福祉学科で用意している全てのプログラムを選択可能にして、介護以外にも医療、障害、子ども分野など多様なキャリアを目指せるようにしている。

さらに、全学的にオフィスアワーを導入しており、教員ごとに決められた日時であれば事前の連絡なしに相談に行ける体制をとっている。授業で関わりがある教員は成績評価などで利害関係があるため、それ以外の教員を頼りにしている学生もいる。学生相談室のカウンセラーや、スチューデントプラザの職員に相談する学生もおり、学生が気軽に頼ることのできる相談先を提供するようにしている。

これらの取組により、社会福祉学科介護福祉コースの中途退学率は全学的に見ても低くなっている。

4.　就職までの支援、就職後の定着支援をする

就職の時点で、学生がどのような施設・事業所に就職するかということが、その後の職場への定着の観点からも重要です。学生が将来のキャリアを考えて就職先の選択ができるようにするための支援、より多くの卒業生に介護分野に就職してもらうための方策が必要です。

また、卒業生の職場への定着促進のためには、就職先だけでなく、出身校からの卒業後のフォローが重要です。養成施設と卒業生の職場である介護事業者が連携して対応することにより就業における心理面へのフォローのほか、スキルアップ等リカレント教育の機会にもつなげていくことが期待できます。

(1) 就職までの支援

＜キャリア形成に係る講座やイベントの開催＞

キャリア形成支援講座により、将来のビジョンを考える機会を提供

（北海道介護福祉学校：北海道夕張郡栗山町）

福祉・介護現場における現状と課題について理解し、専門職としてキャリア形成を考えること、及び専門職として実践現場で活躍するため社会人として必要な一般常識を学ぶことを目的として、学校独自科目として「キャリア形成支援講座」を設けている。以前からキャリアに関する講話の機会は設けていたが、同講座は、1年次 10 時間、2年次 30 時間の計 40 時間の科目として、体系的に整理したものである。

講座の中で、介護福祉士国家資格取得の先に、様々なキャリアがあることを知ってもらったり、様々な卒業生（卒業後数年のロールモデルになるような人、社会福祉士資格をとった人、大学に編入した人、行政で活躍している人など）の話を聞いたりすることで、学生が自身のビジョンを考えるようになっている。

講座開始後、学生が、求人票の内容だけでなく、法人の特徴と自分の重視する点が合致しているかを確認するようになったという変化が見られた（例：地域包括ケアに関する取組に力を入れている社会福祉法人を選ぶ、法人内でのどのようなキャリアパスがあるのかに着目するなど）。また、就職先の事業所から、学生が介護福祉士国家資格を取った後のビジョンを持っていると言われることが増加した。

ホームカミングデーの開催を通じた卒業生との交流

（東洋大学：東京都北区）

卒業後の進路や生活を考える上でより具体的なイメージをもつことができるよう、介護福祉士養成課程の卒業生を学校に呼んで交流を行う「ホームカミングデー」を開催している。

本学では、介護福祉士養成課程でのホームカミングデーを開催しており、特養、在宅、公務員、一般企業などさまざまなところに就職した卒業生を呼び、卒業生が現在働いている職場の様子や就職後の生活について聞いたり、卒業生と交流したりする機会を設けている。

参加した在校生は、半日ほど卒業生とともにグループで話したり、卒業生のプレゼンテーションに積極的に質問をしたりし、卒業生の話を自らと照らし合わせながら、また将来の進路をイメージしながら聞いている。

卒業生からは、介護福祉士の資格を取得して良かったことや、結婚や家の購入といった生活の話を聞くこともあり、介護福祉士という進路に対して不安に思う学生にとっても、具体的な将来像をイメージすることにつながり、安心して卒業後の進路を選択することができるようになる。

＜実習の活用＞

自らの適性を見きわめ、キャリアモデルに出会う介護実習

（聖隷クリストファー大学：静岡県浜松市）

大学入学時には、施設長になる、ケアマネジャーになるといった漠然としたキャリアイメージしか持っていない学生が多い中で、介護実習は、卒業後の進路を考える上でも重要な要素となる。

教員が実習先候補の施設に直接訪問したり、卒業生に聞き込みをしたりして、施設の特徴や状況を把握し、個々の学生の性格等に応じた実習先を選んでいる。特に、最初の実習は、学生が成功体験をして、その後の学習意欲につなげるため、丁寧な指導者がいること、落ち着いた雰囲気の施設であること、フロアにコミュニケーション能力が高い利用者が多いことなどを重視してマッチングをしている。

また、遠隔地出身の学生には、本人の希望を確認した上で、少なくとも１回は出身地域で実習できるように調整している。遠隔地での実習先を探す際は、各都道府県の介護福祉士会にも協力いただいている。

この取組により、就職後も人材を「育てる」という姿勢を持っている施設が実習先として協力してくれており、実習先に就職する学生も非常に多い。また、学生は、実習を通じて、自らの適性を見きわめられるようになっていくとともに、実習先の職員というキャリアモデルと出会い、キャリアイメージを具体化させていっている。

多様な実習先の提供による進路の選択肢の拡大

（東洋大学：東京都北区）

学生が卒業後に選ぶことができる進路の選択肢が広がるよう、多様な実習先での実習機会を提供している。

本学では、4 年間に 4 回の実習を組んでおり、デイサービス・小規模多機能、特養、障がい者支援施設、居宅介護での実習を経験できるようなカリキュラムが組まれている。

体験学習くらいの実習に留まることもある障がい者支援施設についても、18 日配置での通常実習を行っており、実習経験を経て障がい者支援施設に就職する学生も見られる。

学生は各々で就職活動をしており、実習先に就職する学生、実習先以外に就職する学生とさまざまである。本社勤務でいくつかの施設を統括するキャリアがあることを実習先で知り、有料老人ホームの経営会社を志望した学生も見られる。

本学では、卒業後は介護業界に進む学生が最も多いが、生活相談員になったり、民間企業に就職したりする学生も見られており、幅広い選択肢から卒業後の進路を選択している。

(2) 就職後の定着支援

＜就職先への訪問等＞

留学生の就職先施設への訪問による継続的な見守り

（聖隷クリストファー大学介護福祉専門学校：静岡県浜松市）

留学生は、日本人の学生と異なり、家族が日本にいない場合が多く、手厚いサポートが必要となる側面がある。そこで、卒業生が集う「ホームカミングデー」の開催など卒業生全体のフォローに加えて、留学生に配慮した取組も行っている。

具体的には、教員が留学生の就職先施設に訪問し、施設長や同僚職員に対して日頃の感謝を伝えたり、今後のサポートのお願いをしたりしている。

卒業後も教員が積極的な見守りの姿勢を見せることで、留学生が日本で仕事を続ける上での精神的な支えになっている。また、留学生が卒業後に施設で活躍する姿については、専門学校に在学中の留学生にも話して聴かせることで、在学中の留学生にとっても励みとなっている。

＜施設で活躍する卒業生（留学生）の様子＞
（聖隷クリストファー大学介護福祉専門学校資料）

就職先へのフォローアップ訪問・オンライン同窓会

（富山短期大学：富山県富山市）

5月～7月頃に、卒業生の就職先へのフォローアップ訪問を実施し、卒業生の勤務状況を確認するとともに、卒業生が悩んでいることや、就職先の担当者が課題に感じていることがないか確認し、職場に定着できるように支援している。卒業生からのヒアリング内容を元に、職場の環境調整を行うこともあり、定着につながっている。また、就職先の担当者に、①礼儀・基本的マナー、②チームワーク（コミュニケーション能力、協調性等）、③アクション（意欲、行動力等）、④シンキング（課題発見、解決力等）、⑤その他（上司・指導者のコメント等）についての評価や、大学への要望を聞き取り、その結果を報告書にまとめ、学生指導に反映している。訪問は、原則として、ゼミ担任の教員が担当している。

また、慣れない生活に戸惑ったり心配ごとを抱えたりしている卒業生がいた場合に、早期にサポートを行いたいとの考えのもと、卒業後4月中旬頃から、月に1回オンライン同窓会を開催している。オンライン同窓会は、自由参加で、日頃の仕事の様子を話したり、かつてのクラスメイトと顔をあわせて懇談したり、相談しあったり、楽しく話ができる時間となっている。気になる様子の卒業生には、メールや電話をしたり、学校に出向いてもらうなど、学校側からフォロー対応を行うこともある。

5. 国家試験不合格者等を卒業後もフォロー・支援する

各養成施設の介護福祉士国家試験合格率の平均をみると、新卒者の合格率が概ね 80%以上であるのに比べて、既卒では(第 35 回を除き)30%程度と低い合格率となっています。

学生が国家試験に合格できない、あるいは本来受験すべき年に受験できない原因には、学力のみならず、心身の不調など様々な要因が考えられ、卒業後も引き続きフォロー・支援が求められています。

国家試験不合格者等の卒業後のフォロー等については、現在体系的に実施されているわけではありませんが、学生のきめ細かな支援といった観点、また、養成施設が特色ある教育を実施するといった観点からも、今後の重要な取組です。

国家試験不合格者への継続的な情報共有や支援

(いばらき中央福祉専門学校:茨城県水戸市)

本校は、介護福祉士国家試験対策に注力し、毎年高い合格率となっているが、その年によって全員合格が難しい時もあった。学生の人数が多くなるほど、全員のモチベーションを高く保ち続けることが難しくなってくる。

国家試験不合格者は、翌年の合格を目指して働きながら勉強を続けることになるが、本校では同じ法人・グループ内で働く卒業生に対しては、在学時と同様に支援を続けている。

例えば、国家試験の過去問や本校のオリジナル問題から構成され、年 11 回開催している模擬試験を引き続き受けることができる。また、模擬試験や国家試験受験の申込等の情報共有も、在学生と同様に行っている。国家試験当日も在学生と一緒に、スクールバスで会場まで連れて行っている。卒業後に受験する場合、翌年(1年後)までが勝負だと考え、支援をしている。

6.　地域と連携し、介護福祉士を育てる

養成施設は、入学者の確保、入学した学生の教育、就職支援、卒業後の関わりや支援（就職後の定着支援、国家試験不合格者のフォロー）のいずれの局面においても、地域と連携することが必要です。養成施設の中にとどまらず、教員が学生と一緒になって、積極的に地域に出ていくことが求められています。

また、介護の専門知識及び介護福祉士を養成するための知見を持つ養成施設の教員が、自らの養成施設の学生・卒業以外の介護人材に働きかけること、すなわち「地域の介護福祉士を育てる」視点も重要です。

なお、養成施設だけの取組には限界があるため、地域の自治体や関係機関も積極的に養成施設を支えていく視点をもち、連携していくことが求められ、そのような関係作りを日頃からしていくことが重要です。

介護助手の育成等による地域貢献

（いばらき中央福祉専門学校：茨城県水戸市）

養成施設の地域活動の一環として、広く介護人材を確保するため、介護助手の育成、地域のイベントでの送迎等に取り組んでいる。当初は学校独自の取組であったが、2020 年から 3 年間は水戸市の補助金（市民活動団体の支援）を受け、2023 年からは茨城県社会福祉協議会と連携し、地域課題の解決に取り組んでいる。

介護助手の育成は、基礎講座（3 時間）と入門的研修（21 時間）の間の位置づけで、1 日（10～16 時及びマッチング 1 時間）の講座となっている（参加者数：令和 5 年度 220 名、令和 6 年度 153 名、計 353 名）。さらに勉強したい人には入門的研修の受講を勧めており、受講者が地域の介護事業所で働くところまでつなげている。そのため、短時間勤務を希望する人も受け入れることができるよう、施設側にも働きかけ、意識の変化を促している。

地域の運転手募集については、地域の高齢者から、バスが廃止され「敬老の日」のイベントの交通手段がなくなって困っている話を聞き、地域の住民とともに、送迎サービスをするようにした。

「地域こそが学校である」と考え、介護教育の得意分野を活かしながら、地域課題の解決のために自分たちができることに取り組むことで、地域住民の介護及び介護施設の存在への関心を高めている。また、イベントの参加者が、子どもや孫に本校の話をしてくれることによる PR 効果も期待されている。

教育課程に地域でのフィールドワークを取り入れ、生きた学びの機会を提供

（富山短期大学：富山県富山市）

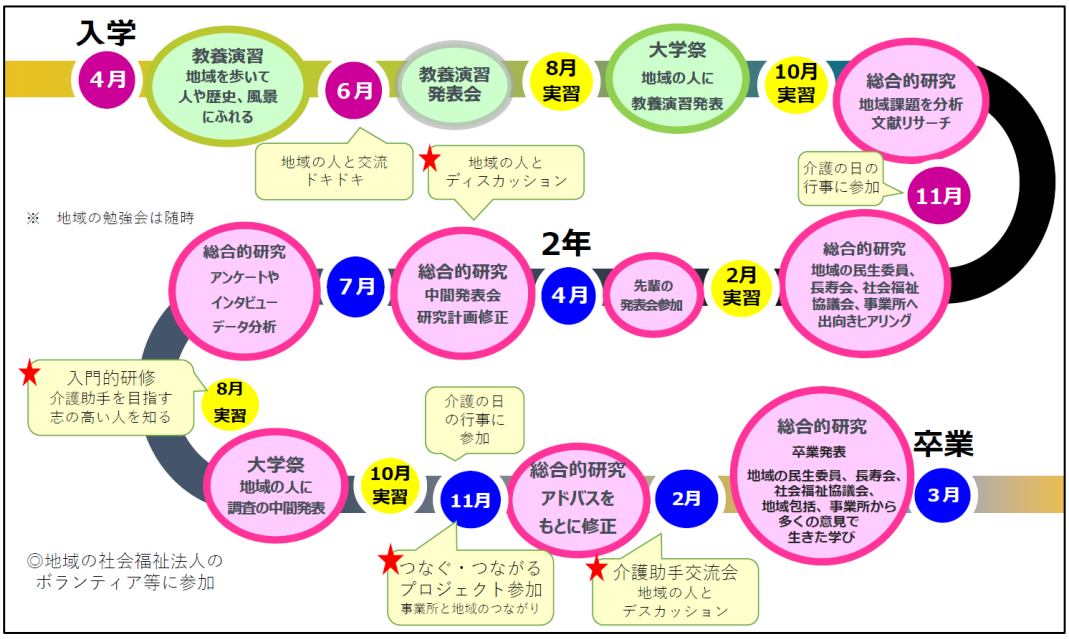
学生時代から「地域」に関心を持ち、生活を支える介護の視点から課題解決を考える力を養うことが大切であるという考えのもと、教育課程に地域でのフィールドワークのプログラムを取り入れている。

1年次前期の教養演習では、地域に興味関心を持ち、地域とのつながりの大切さを学ぶことを目的とし、小グループに分かれ、それぞれが設定したテーマでフィールドワークを実施する（例：地域の名産品「呉羽梨」に注目し、歴史や生産者の思い、後継者不在の課題や農福連携の可能性などについて学ぶ）。

1年生後期から2年生後期では地域課題に対してテーマを決め、呉羽地域をフィールドに調査や実践活動を踏まえて研究する「総合的研究」に取り組む（例：介護ロボットを活用した小学校での魅力発信講座の実施）。研究の過程や発表の場で、出席された地域の民生委員、長寿会、社会福祉協議会、地域包括支援センター、介護事業所等の方々から多くの意見をもらい、生きた学びの機会となっている。

「介護の魅力発信」をテーマとした総合的研究から、卒業後の取組にも発展した。総合的研究で得られた成果をもとに、学生・卒業生で魅力発信隊（「広がるチューリップ」）を結成し、小中学生や地域住民等への出前講座等を通した介護の魅力発信の取組を行っている。

＜教養演習・総合的研究の２年間の流れ＞



（富山短期大学資料）

「世代間交流」を意図した科目を通じた高齢者や子どもとの交流

（白梅学園大学・子ども学部　家族・地域支援学科：東京都小平市）

他学科の学生に対して、高齢者への関心を高めるため、「世代間交流」についての企画や高齢者との交流を企画・実施する演習を他学科にも見える形で実施している。

本学科の科目である「世代間交流論」の中では、高齢者を学校に招待し、一緒に作品を作る「コミュニティカフェ」の企画・運営を行う演習がある。また、学部全体で開講され本学科の教員も担当教員の一人として参画している「地域子育て支援演習」の中では、地域の親子やお年寄り、あるいは障害を持った人々が参加する「白梅子育て広場」の企画・運営を行う演習も存在している。

「コミュニティカフェ」では、企画終了後も学食で高齢者と交流する時間を設けるなど、他学科の学生も本学科における取組や高齢者との交流の様子が自然に目に入るようになっていて、高齢者や介護福祉に対する関心を持つきっかけを作っている。

また、「白梅子育て広場」においては、子どもや高齢者それぞれに配慮した準備が行われることから、その様子を実際に運営側として経験した学生たちが、高齢者への接し方やケア方法についての気付きを得るような機会も設けられており、卒業後長い目で見たときに他学科出身の学生も高齢者分野に関わりやすくなるような働きかけとなっている。

＜白梅子育て広場の様子＞

（白梅学園大学資料）

地域と連携した防災イベントの開催

（白梅学園大学・子ども学部 家族・地域支援学科：東京都小平市）

学生が将来介護福祉施設に就職した際に、自施設の災害時の対応について注意が行くようになることを期待し、「白梅防災プロジェクト」を実施している。

教員、学生、卒業者や防災士の資格を持つ大学職員で企画運営をしており、2024年11月9日(土)には「みんなでリアルに防災訓練」と題して、小平市社会福祉協議会及び小平青年会議所との合同企画として、災害ボランティアセンター設置のシミュレーションが実施された。避難訓練のほか、炊き出し体験、消防の協力により起震車での地震体験なども実施され、本校の学生のほか、地元の市会議員や地域住民など当日は200名以上が参加した。地域における災害時の対応について実際に訓練に参加することで、学生自身が自分事として災害をとらえる視点を養成し、将来自分が介護福祉施設に就職した際に、施設の関係者をどう守るか、という課題感の醸成を促した。

また大学の避難訓練時においても、介護福祉士を目指す学生が中心となり炊き出しを行い、消防署と協力し消火器訓練を行った。

企画に参加して、地域を取り巻く多様な主体との接点を持つことで、社会福祉協議会に関心を持つようになった学生や、介護福祉施設のおけるBCPを卒業論文のテーマとした学生も存在した。

＜白梅防災プロジェクトの様子＞

（白梅学園大学資料）

社会福祉協議会を通じた介護現場からの講師受入れ

（聖隷クリストファー大学：静岡県浜松市）

介護福祉士は地域に根差した職業であり、介護の学生は、大学の教員だけで育てるものではないと考えている。そこで、地域の介護事業所などからも協力を得て、授業を行っている。

具体的には、学生が実習に行くことが難しい地域密着型サービスや訪問系サービスの介護事業所に、静岡県社会福祉協議会を通じて、講師派遣を依頼している。

講師による授業を通じて、学生は、介護福祉士のキャリアの多様性を知るとともに、介護現場や利用者の実際の姿を学んでいる。

＜外部講師による講義の様子＞
（聖隷クリストファー大学資料）

また、学生は法制度の理解が苦手な傾向があるが、講師から話をしてもらう際に、実務の裏付けとなっている法制度についても触れてもらうことで、実務と法制度を結び付けて理解を深めることが可能となっている。

地域住民向けの授業等における学生の活躍

（桃山学院大学：大阪府和泉市）

地域住民との交流を図り、大学への理解を深めるため、和泉市民を対象とした「みんなの大学」を開催し、社会学部の学生が授業を行っている。

介護福祉士養成課程の学生は、一コマを担当し住民を対象に認知症の人も楽しむことができるアートワーク作りの体験会を行っている。今年は約１か月前から準備を始め、参加者が時間内に作品を作り上げられるよう、学生同士で事前練習をしていた。

介護福祉士養成課程では授業や実習で高齢者と接する機会が多いため、学生は皆コミュニケーション能力が高く、臆せず参加者に話しかけ、打ち解けることができる。アートはアクティビティとして提供しやすいだけでなく、ケアとの親和性が高い。認知症の人がアートに取り組む中にケアのヒントが隠されており、必要な生活支援のポイントを見出すことができると考えられている。

また、和泉市社会福祉協議会からの依頼により、学生（4年生）10 名の協力を得て、高齢者向けのスマホ教室を開催したこともある。ここでも、学生が積極的に参加者とコミュニケーションを図り、スマホ操作での悩みや困りごとの解決に貢献した。

これらの体験を通じて、介護福祉士養成課程での学びを、住民とのやり取りの中でリアルに実感することができている。

＜「みんなの大学」での授業：アートワークを楽しもう＞

＜「みんなの大学」チラシ＞

（桃山学院大学資料）

本事例集の作成にご協力いただいた介護福祉士養成施設

本事例集の作成にあたり、専門学校4校、短期大学4校、4年制大学5校にご協力をいただきました。以下では、各養成施設の概要をまとめています。

＜専門学校＞

1. 北海道介護福祉学校・介護福祉学科（北海道夕張郡栗山町）

- 設置者 :栗山町
- 介護福祉士養成課程定員 :40 名･2年課程
- 在学者数 :1 学年 23 名、2学年 21 名(うち留学生0名)
- 介護福祉士養成課程専任教員数 :5名
- その他の学科 :なし

北海道介護福祉学校は、全国で唯一の町立の介護福祉士養成校として、地域で活躍する人材の育成に力を入れている。①国家資格取得への学び、②地域福祉の課題を考える学び、③自身の将来を考える学びを柱として、37 年間の歴史と伝統のもと、「福祉のまち栗山」をフィールドとした実践的な学びの機会を提供している。

町立校であることを活かし、様々な機関や団体との連携を実現している。地元の北海道栗山高等学校とは、高専連携の取組を進めており、地域社会において中核的な立場で活躍していける人材の育成に取り組んでいる。その他にも、町の助成を受けて、毎年数名の学生をフィンランド交流事業に派遣する取組を行っている。

2. いばらき中央福祉専門学校・介護福祉科（茨城県水戸市）

- 設置者 :社会福祉法人北養会
- 介護福祉士養成課程定員 :80 名・2年課程
- 在学者数 :1学年 30 名(うち留学生5名)
  2学年38名(うち留学生8名)
- 介護福祉士養成課程専任教員数 :5 名
- その他の学科 :なし

いばらき中央福祉専門学校は、養成施設・特別養護老人ホーム・保育所が一体となった「内原キャンパス」内に設置されており、養成施設で学んだことをすぐに現場で確認することができる。隣接した特別養護老人ホームや法人内の他施設に就職した卒業生が、後輩の指導のため、養成施設を訪れることもある。

また、2021 年度より新カリキュラムに「地域共生社会の理解」「地域における生活支援の実際」を組み込み、地域の古民家を活用した「ありが分校」を拠点として教員が学生とともに地域のコミュニティづくりに参加している。地域での実施のフィールドワークで地域課題の把握・解決の実践を行うことが、学生にとっての魅力の向上につながっている。

3. 若狭医療福祉専門学校・介護福祉科（福井県三方郡美浜町）

- 設置者 :学校法人青池学園
- 介護福祉士養成課程定員 :40 名・2年課程
- 在学者数 : 1 学年 28 名(うち留学生 24 名)
  2学年 34 名(うち留学生 31 名)
- 介護福祉士養成課程専任教員数 :4 名
- その他の学科 :理学療法科

若狭医療福祉専門学校の設置者である学校法人青池学園は、フィリピンで日本語学校を開校しているほか、日本でも日本語学科のある専門学校を開校しており、現地での学生募集～来日前・来日後の日本語教育～養成校卒業まで一貫した教育を行っている。

学生の多くが留学生である中で、各段階で目標となる日本語レベルを設定し、介護福祉士国家試験に必要な能力・知識・自信を段階的に育んでいる。また、一人ひとりの個性をしっかり伸ばすために、授業・実習は少人数制を採用している。

日本人学生にとっても、留学生と共に学び、異なる価値観や文化に触れることのできる学習環境が魅力となっている。

4. 聖隷クリストファー大学介護福祉専門学校・介護福祉学科（静岡県浜松市）

- 設置者 :学校法人聖隷学園
- 介護福祉士養成課程定員 :40 名・2年課程
- 在学者数 :1 学年 12 名(うち留学生8名)、2学年 19 名(うち留学生 6 名)
- 介護福祉士養成課程専任教員数 :3 名
- その他の学科 :なし

聖隷クリストファー大学介護福祉専門学校は、大学に併設された立地を生かし、大学教員による授業や大学で開講している授業を受講できるなど、大学レベルの教育を受けることができる。国家試験対策についても、大学・専門学校合同で対策講座を実施し、外部講師を導入するなどの取組により、留学生を含めて非常に高い合格率を維持している。

なお、留学生には、日本語学習支援を行うとともに、日本人学生とのサポート関係の構築を重視しており、卒業後の継続的な見守りも行っている。

また、自ら介護を志す人材を増やしていく取組として、中学生・高校生が参加できる介護・福祉の体験教室や、介護・福祉の体験ボランティア企画を実施している。

＜短期大学＞

5. 日本赤十字秋田短期大学・介護福祉学科（秋田県秋田市）

※2025（令和 7）年 4 月 1 日より日本赤十字東北看護大学介護福祉短期大学部に名称変更。

- 設置者 :学校法人日本赤十字学園
- 介護福祉士養成課程定員 :30 名・2年課程
- 在学者数 :1 学年 13 名、2学年 14 名(うち留学生 10 名)
- 介護福祉士養成課程専任教員数 :10 名
- その他の学科 :なし

日本赤十字秋田短期大学は、赤十字の教育施設では日本で唯一の介護福祉士を養成している短期大学であり、赤十字の「人道」の精神に基づいた介護福祉教育を行っている。

短期大学士に必要とされる一般教養と介護福祉士に必要とされる知識・能力を修得するための「基礎科目」に、「赤十字・防災科目」、「専門科目」を加えた 3 本柱を中心として教育課程を構成している。「赤十字・防災科目」では、赤十字に関する理解を土台に、防災について学ぶ。「専門科目」では、介護福祉に必要な研究的視点を養うための「研究」を必修としている。

介護福祉人材の確保と資質向上への貢献を目指す新たな取組として、社会福祉施設等で働きながら、通常 2 年のカリキュラムを 3 年かけて学ぶ、長期履修制度を導入した。

6. 富山短期大学・健康福祉学科（富山県富山市）

- 設置者 :学校法人富山国際学園
- 介護福祉士養成課程定員 :40 名・2年課程
- 在学者数 :1 学年 27 名、2学年 23 名(うち留学生 0 名)
- 介護福祉士養成課程専任教員数 :7 名(健康福祉学科専任教員数)
- その他の学科 :食物栄養学科/専攻科、幼児教育学科、経営情報学科

富山短期大学健康福祉学科では、「幸せの基盤＝健康」を柱に、高齢者や障害者の生活を支える介護福祉士、健康産業や医療事務等の福祉ビジネスパーソン、編入学し社会福祉士取得を目指すなど、地域共生社会で活躍する人材の養成に取り組んでいる。

1年次後期から介護福祉、福祉ビジネス、ソーシャルワークの3つの分野での学びを深めるカリキュラムを提供(複数の分野を選択可能)し、多様な学びと進路選択ができる。また、介護ロボットや ICT を学ぶ授業に力を入れし、デジタル技術活用のKAIGO、人権や多様性尊重のKAIGOを希求、時代に対応した学びの機会を提供している。

7. 静岡県立大学短期大学部・社会福祉学科介護福祉専攻（静岡県静岡市）

- 設置者 :静岡県公立大学法人
- 介護福祉士養成課程定員 :50 名・2年課程
- 在学者数 :1 学年 15 名、2学年 18 名(うち留学生 0 名)
- 介護福祉士養成課程専任教員数 :8 名(介護福祉専攻教員数)
- その他の学科 :歯科衛生学科、こども学科

静岡県立大学短期大学部・社会福祉学科介護福祉専攻は、静岡県立大学小鹿キャンパス内にあり、介護福祉職のリーダーとして、現場で活躍できる人材を育成している。介護福祉士を養成する全国で唯一の公立短大として、これまでに約 1,200 人の介護福祉士を輩出している。

特徴的な授業として、「発展介護技術」「発展介護過程」「福祉経営とリーダーシップ」等が挙げられる。特に、「福祉経営とリーダーシップ」については、平成 29 年度のカリキュラム改正前から導入しており、介護施設の経営・人材育成やチーム力向上のための組織論、課題解決に向けたマネジメント・リーダーシップなどについて学修するものとなっている。

8. 川崎医療短期大学・医療介護福祉学科（岡山県岡山市）

- 設置者 :学校法人川崎学園
- 介護福祉士養成課程定員 :50 名･3 年課程
- 在学者数 :1 学年 7 名、2学年 11 名、3学年 13 名（うち留学生0名）
- 介護福祉士養成課程専任教員数 :10 名（医療介護福祉学科専任教員数）
- その他の学科 :看護学科

川崎医療短期大学医療介護福祉学科は、「医療に強い介護福祉士の養成」を掲げ、川崎学園内の3つの附属病院などとのネットワークを活かしながら、医療の知識と実践力を身につけた介護福祉士の養成に取り組んでいる。

令和3年度入学者より、修業年限を2年制から3年制に移行し、2年間の介護福祉士養成課程に加え、病院実習、地域介護実践実習、医療やリハビリテーション、チームマネジメントに関する科目を設定し、カリキュラムをより充実させている。

＜4 年制大学＞

9. 北海道医療大学・看護福祉学部 福祉マネジメント学科（北海道石狩郡当別町）

- 設置者 :学校法人東日本学園
- 介護福祉士養成課程定員 :20 名･4 年課程
- 介護福祉士養成課程専任教員数 :4 名
- その他の学科 :看護学科

北海道医療大学看護福祉学部福祉マネジメント学科は、ケア・マネジメントコース、メンタルヘルス・マネジメントコース、スポーツ・マネジメントコース、ソーシャル・マネジメントコースに分かれている。

ケア・マネジメントコースは、1990 年に札幌医療福祉専門学校介護福祉学科として開校した。2002 年に北海道医療大学への発展的な統合が行われ（看護福祉学部臨床福祉学科介護福祉士養成コース）、2022 年に改称して現在に至る。ケア・マネジメントコースの選択は入学後 2 週間程度で行うことになっており、卒業と同時に介護福祉士国家試験受験資格と社会福祉士国家試験受験資格を得ることができる。

10. 東洋大学・福祉社会デザイン学部 社会福祉学科（東京都北区）

- 設置者 :学校法人東洋大学
- 介護福祉士養成課程定員 :40 名･4 年課程
- 在学者数 :1 学年 40 名、2 学年 39 名、
  3 学年 25 名、4 学年 29 名(うち留学生 0 名)
- 介護福祉士養成課程専任教員数 :5 名
- その他の学科 :子ども支援学科、人間環境デザイン学科

東洋大学は 4 つのキャンパス(白山/赤羽台/川越/朝霞)に 14 学部 15研究科を擁する大学である。福祉社会デザイン学部社会福祉学科は「赤羽台キャンパス」に拠点を構え、実践的な学習･研究環境を提供している。それを支えるのが、1 年次から 4 年次までのゼミナールと社会調査実習などの実務面を考慮したカリキュラムであり、福祉の現場をリードできる学生の育成に力を入れている。

特に、介護現場で活用されている福祉用具や、最先端の ICT や AI を使用した機器について学ぶ授業に力を入れており、その使い方のみならず、福祉用具や機器をどのように用いれば利用者のより良い生活につながるかを考えることができる人材を育てている。

11. 白梅学園大学・子ども学部 家族・地域支援学科（東京都小平市）

- 設置者　:学校法人白梅学園
- 介護福祉士養成課程定員　:40 名･4 年課程
- 在学者数　:1 学年 8 名、2 学年 24 名、3 学年 28 名、4 学年 47 名(うち留学生 0 名)
- 介護福祉士養成課程専任教員数　:7 名
- その他の学科　:子ども学科、発達臨床学科(2024 年度入学生より募集停止)、子ども心理学科(2024 年 4 月に開設)、教育学科(2024 年 4 月に開設)

白梅学園大学 子ども学部 家族･地域支援学科では、社会福祉に関して理解し、ケアワーク、ソーシャルワークについての理論学習及び実習を経て習得することができるだけでなく、子どもや家族、地域という広い視点で社会課題について理解し、人々全体を支援できる資質、能力を身に着けることができる教育が提供されているという点に特色がある。

また、地域貢献活動や地域との連携を図った活動がカリキュラム内外で企画･実施されており、学生自身も活動に携わる機会が提供されている点も特色である。

例えば、災害について自分事として捉えることを促す「白梅防災プロジェクト」の一環として、地域の社会福祉協議会や青年会議所との合同企画の形で防災訓練も実施されているほか、学部全体の取組として、地域の子どもたち、保護者、高齢者、障害者など地域の人々と学生がつながる交流活動としての「白梅子育て広場～あそぼう会＆世代間交流広場」が実施されており、学生自らが主体的に運営に携わっている。

12. 聖隷クリストファー大学・社会福祉学部 介護福祉コース（静岡県浜松市）

- 設置者 :学校法人聖隷学園
- 介護福祉士養成課程定員 :60 名･4 年課程
- 在学者数 :1 学年 16 名、2 学年 16 名、
  3 学年 15 名、4 学年 15 名(うち留学生 0 名)
- 介護福祉士養成課程専任教員数 :14名
- その他の学科 :ソーシャルワークコース、福祉心理コース

聖隷クリストファー大学 社会福祉学部 社会福祉学科 介護福祉コースは、時代や社会の変化に対応しながら、地域や社会に貢献できる、人間性の豊かなケアワーカーを育成している。隣人愛に基盤をおいた人間性を涵養しながら、支援するために必要となる知識や技術を修得することに加え、人と環境をとらえる視点を幅広くもつことを求めている。

カリキュラムを改定することで、2年生からでも、他コースから介護福祉コースに転向し、卒業までに介護福祉士の資格を取得できる仕組みにした。また、授業はグループワークなどを取り入れたアクティブラーニングが主体となっており、4 年生前期に開講する「介護福祉実践演習」では、学習成果の定着とともに、国家試験の受験に向けた素地を作っている。

13. 桃山学院大学・社会学部 ソーシャルデザイン学科（大阪府和泉市）

- 設置者 :学校法人桃山学院
- 介護福祉士養成課程定員 :20 名･4年課程
- 在学者数 : 1 学年15名(うち留学生 2 名)、
  2学年 17 名(うち留学生 1 名)、
  3 学年 10 名(うち留学生 0 名)、
  4 学年 12 名(うち留学生 0 名)
- 介護福祉士養成課程専任教員数 :12 名(ソーシャルデザイン学科専任教員数)
- その他の学科 :なし

桃山学院大学社会学部ソーシャルデザイン学科は、2022 年に社会学部社会福祉学科からの名称変更により誕生した。「福祉＝幸福(しあわせ)」という観点から、社会課題を福祉的な面から解決し、「一人ひとりのしあわせ」を実現することで、“共生社会をデザインできる人”を養成する学科となっている。

ソーシャルデザイン学科には、介護福祉士、社会福祉士、精神保健福祉士の国家資格取得を目指す学生のほか、福祉全般に関心を持つ学生もみられる。入学後の学科説明や入学当初の授業等において、学生の介護への関心、介護福祉士養成課程への関心を高める取組が行われている。

厚生労働省 令和6年度老人保健健康増進等事業(老人保健事業推進費等補助金)
介護福祉士養成施設における国家試験合格に向けた取組に関する調査研究事業

検討委員会 委員名簿

(敬称略)

(座長)

鈴木 俊文	静岡県立大学短期大学部 教授

(委員:五十音順)

井口 健一郎	社会福祉法人小田原福祉会 特別養護老人ホーム潤生園 施設長
伊藤 浩一	社会福祉法人北養会 いばらき中央福祉専門学校 学校長代行
植上 一希	福岡大学人文学部 教授
川井 太加子	桃山学院大学 社会学部 教授
中島 眞由美	富山短期大学健康福祉学科 教授/学科長
野田 由佳里	公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会 理事

令和6年度　老人保健事業推進費等補助金　老人保健健康増進等事業
介護福祉士養成施設における国家試験合格に向けた取組に関する調査研究事業

介護福祉士養成のための6つの支援に関する取組事例集
～地域の福祉を支える介護福祉士を養成するために～

令和7年3月

発行　三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社
住所　〒105-8501　東京都港区虎ノ門5−11−2　オランダヒルズ森タワー